



W

W. 朝鮮戦争(Korean War)

目次:

- 1. KW地形(KW Terrain)
- 2. アメリカ軍(The Americans)
- 3. 韓国軍(The South Koreans)
- 4. イギリス連邦朝鮮派遣軍
(British Commonwealth Forces Korea)
- 5. その他の国連軍(Other UN Forces)
- 6. 北朝鮮軍(The North Koreans)
- 7. 中国共産軍(The Communist Chinese)
- 8. KW 航空支援(KW Air Support)
- 9. 前線航空管制員と近接航空支援
(FAC & Close Air Support)
- 10. サーチライト(Searchlights)

W.1 朝鮮戦争(KW)ルール¹: W章は、1945年1月から1953年7月における朝鮮半島でのシナリオに適用される。A~J章のルールは、W章と統合して適用される。

W.2 同盟(Alliances): 朝鮮戦争で戦った様々な戦闘部隊は、一般に次の2つの同盟関係に集約される: 国連軍(UN)と共産軍である。朝鮮戦争に参戦した各戦闘部隊の詳細は、KW国籍別能力表を参照すること。

W.2A 国連(UN)軍²: アメリカ、オーストラリア、ベルギー、イギリス、カナダ、コロンビア、オランダ、エチオピア、フィリピン、フランス、ギリシャ、ルクセンブルグ、ニュージーランド、南アフリカ、韓国、タイ、そしてトルコ軍をひとまとめにして国連軍と表記する。イギリス連邦朝鮮派遣軍(BCFK)には、オーストラリア、イギリス、カナダ、そしてニュージーランド軍が含まれる。

W.2B 共産軍(Communist Forces)³: 北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)軍と中国(中華人民共和国)軍をひとまとめにして共産軍と表記する。

W.2C 同盟国の部隊: 異なる国籍の同盟国同士は『同盟国の部隊(A10.7)』とみなす [例外: アメリカ式 KMC(3.32)および RM/U.S.M.C.(4.2)]。同盟国の部隊の兵器は(たとえイギリス軍がアメリカ軍の MTR や BAZ を使用しても)捕獲兵器とみなさない。

W.3 KW 地形: KW シナリオでは、B 章ルールに以下の変更を加える:

- すべての樹は疎林(B35);
- すべての麦畑と水田は田地(1.2);
- すべての道路は未舗装(B3.1);
- すべての橋は石造の1車線(B6.431);
- 地下室(B23.41)は存在せず;
- 岩場(B17)は隠蔽地形(A12.12)かつ不意打ち(A11.4)が生じる地形となる。

W.4 KW 雑則:

- 厳冬(E3.74)の適用中、すべての発動機付車両の MP は赤(D2.5-51)とみなしゆえに機械的信頼性 DR の対象となる。加えて、すべての兵器の B#/X#は1減少し、すべての SL 信頼性 DR(10.45)に+1DRM が適用される。
- 3月、もしくは11月のシナリオにおいて、融雪地表(Extreme Thaw)がSSRによって適用された場合、A-P/A-T地雷 [例外: 連鎖地雷; B28.531] のIFT DRのうち、修整前色付きdrが1であれば、効果なしとなる⁴。
- アメリカ製AFVのジャイロスタビライザー(D11.1; H1.42)は機能しない⁵。



W.5 WP (白燐) 手榴弾: KPA(6.1)および CPVA(7.1)の突撃工兵部隊と、すべての国連軍分隊はA24.3に従ってWP手榴弾を使用できる。



W.6 銃剣突撃(Bayonet Charge)⁶: 銃剣突撃は、SSRに特記された場合にのみ、国連軍によって実施可能となる。銃剣突撃は、以下の点を除いてパンザイ突撃(G1.5)のルールに従う。銃剣突撃の“目標”は、確認された敵歩兵ユニットでなければならない。武装した、釘付けでない、統制状態の歩兵ユニットのみが銃剣突撃を実施できる。加えて、銃剣突撃開始時に要求される指揮官のNTC(W.6A)の前に、参加するすべてのユニットを指定しておかなければならない。銃剣突撃を実施したユニットは、

W.7B

そのMPの終了時に「鈍兵」にならない。

W.6A NTC: 銃剣突撃は、ヒーロー-SMC単独で実施するのではない限り、参加指揮官の1つが銃剣突撃開始のためのNTCに成功せねばならない[例外: エチオピア、フランス、およびトルコ軍; 5.2]。そのNTC に対して適用できるDRMは、参加するヒーロー/ヒーロー指揮官のヒーローDRM だけである。指揮官がNTC に失敗したら、その指揮官は釘付け状態となり、もはや銃剣突撃に参加していないとみなされる; その場合、参加している別の指揮官がNTCを試みねばならない。参加する指揮官がいなければ銃剣突撃は実施できない。その場合、事前に指定されたユニットはそのMPで1区域のみ[例外: 狂暴化; 逃走]移動できるが、その他のユニットが移動する前に移動を行わねばならない。



W.6B 格闘戦CC: 銃剣突撃を実施した非混乱状態の歩兵ユニットが、1個以上そのプレイヤーターンのCCに参加した場合、そのCCは自動的に格闘戦(J2.31)となる。ただし、そのユニットがそのフェイズに不意打ちを受けているか、もしくは釘付けの場合は格闘戦にならない。格闘戦CCは、車両/PRC/トーチカ内部のユニットに対してからは宣言できない。



W.7 時限(Variable Time; VT)信管⁷: 近接信管—朝鮮戦争時代は時限 (VT) 信管として知られていた—付のHE弾は、アメリカ軍であれば1950年9月から100mm以上のOBAモジュールで使用できるようになり、1952年1月からはすべての国連軍が80mm以上のOBAモジュールで使用できる[例外: VT信管は、すべての迫撃砲OBAで使用不可である]。VT信管が使用できる砲撃任務 (C1.7) は、HE通常射撃と攪乱砲撃だけである。VT信管を使用していることはFFE: 1が盤上に配置された時に宣言し、VTE: 1カウンターでそれを表示する。

W.7A VT TEM: VT FFEで攻撃された目標には、VT TEM表に記載された追加TEMが適用される。他のすべてのTEMやDRMは変更なく適用する[例外: W.7B]。

VT TEM表

地形	歩兵/騎兵/砲	PRC/OT & 非装甲車両	CT 車両
建物、トーチカ、洞窟、排水路、橋の下	+1*	+1*	+1
瓦礫、岩場、小屋、屋根のない建物	0	-1†	
その他の全地形	-1		

*致命的命中(C3.71)の解決時、正負逆にしない。
†D5.31-3111に関して、空中炸裂(B13.3)とみなす。

例: 開路地にあるCT AFVが、VT FFEの攻撃を受けた。CE 状態の操作班には一般付随攻撃に対し、通常のCE DRMに加えて-1 VT TEMが適用される。AFV自体への攻撃には、C1.55のDRM に加えて+1 VT TEMが適用される。

例: 開路地のOT AFVが、VT FFEの攻撃を受けた。操作班は(CE、BUのいずれであっても)一般付随攻撃に対し、通常のCE DRMに加えて-1 VT TEMが適用される。それゆえ、操作班は『無防備な操作班』となり、AFVは非装甲車両であるかのように扱われる(A7.308; D5.311)。車両自体に対してはVT TEMを適用しない。

W.7B 地形と天候: VT FFEのFPは、以下の地形によって半減されない。沼沢地(B16.31)、砂地(F7.4)、および水耕期の水田(G8.12); 加えて、以下の目標に対しても半減されない。ポート(E5.5)、渡渉中(G13.421)、および海岸障害物(G14.56)。空中炸裂(B13.3)とハマダ(F3.4)に対する-1 TEMと、泥濘(E3.62)と深雪(E3.731)に対する+1 TEMは適用されない。VTは強い雨 (E3.51)により雨が強くなった場合) が降っていたら使用できない。強い雨が降り始めたときに存在するすべてのVT FFEカウンターは、直ちにキャンセル(C1.35)される。



W.7C



W.7C 地形と野戦構築物への効果：特記のない限り、地形と野戦構築物に対するVT FEEの効果は、通常のHE FFEと同一である。VT FFEによる攻撃は、以下に述べる事象を決して引き起こさない。弾痕(B2.1)の生成、橋の破壊(B6.33) [例外：浮橋(B6.41)と歩兵用浮橋(B6.44)]、氷の除去(B21.6)、建物の瓦礫化(B24.11)、炎の生成(B25.13；G5.6)、地雷源の除去/戦力低下(B28.62)、道路障害の除去(B29.5)、トーチカの除去(B30.92)、土塁の除去(F8.41)、バンジヘクスサイドの除去(G9.72)、洞窟の除去(G11.88)、防波堤に突破口を開ける(G13.624)、阻止杭の除去(G14.56)。



W.8 HEAT対6以上のAF⁶：6以上のAF(D1.6)に対するHEAT弾の破壊判定時、不発とならなかつた修整後TK DRの色付きdrが6以上ならば、その結果は不発(C7.35)となる [例外：致命的命中(C3.7)、もしくは修整前TK DRが最終TK#未満の場合、その結果は『衝撃の可能性(C7.41)』と半減されたFPでの付随攻撃となる]。



W.8A バズーカ⁹：BAZ44とBAZ45の修整前TK DRは、破壊確認とW.8の両方に関して、色付きdrに対し+2drmが適用される。BAZ50と51式は、石垣/建物/瓦礫/トーチカのTEMを受けていない歩兵/騎兵に対しても、1FPのHE相当(C8.31)で射撃できる [例外：沼沢地(B16)/深淵(B20.43)の小川内のユニット；渡河(B21.41)/渡渉(G13.42)中のユニット；深雪(E3.731)TEMを受けるユニット；水耕期の水田(G8.12)内部において、かつあぜ道ヘクスサイド(G8.3)/生け垣ヘクスサイド(B9.3)TEMを受けていないユニット]。



W.9 無反動砲(RCL)：OBで与えられた壕に初期配置されたRCLは(C12.23に反して)その壕から射撃可能であり、その際後方噴射もしくは緊急事態(C13.8-81)のペナルティを受けない。その様なRCLは、初期配置された区域から移動した場合、シナリオを通じて上記の特典を失う。



W.10 仕掛け照明弾：仕掛け照明弾(E1.95)は国連軍のみが使用可能であり、加えて『打上げ照明弾(W.10A)』である可能性がある。ジャングル/竹林/鉄条網/バンジ区域に加え、繁み/林/低草地/農閑期の水田、そして開墾地 [例外：舗装道路(B3)/滑走路(B7)] 区域にも仕掛け照明弾を設けることができる。



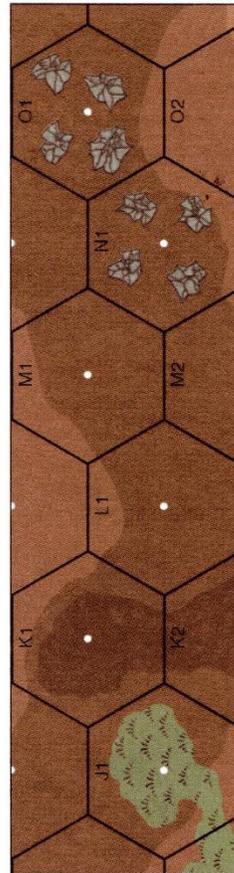
W.10A 打上げ照明弾 (Pop-Up Flares) ¹⁰：仕掛け照明弾が作動した場合 [例外：ジャングル/竹林/林区域]、所有プレイヤーは直ちにdr(Δ)を行う。このdrが1ならば、通常の仕掛け照明弾ではなく打上げ照明弾が代わりに作動したことになり、仕掛け照明弾カウンターを1/2インチパラシュートカウンター上に乗せることでこれを表す。

W.10B 効果と持続時間：打上げ照明弾は星弾(E19.23)と同じ照明効果を発揮するが、通常の仕掛け照明弾(E1.951)と同様に取り除かれる。

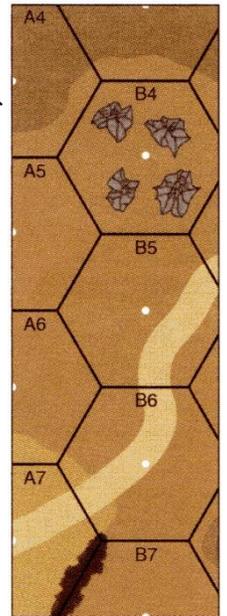
W

1. KW地形

1.1 非汎用地図盤での進入/退出：地図盤への進入/退出/盤外移動 (例えば、A2.51、A2.6、E8.221、E9.41) に関するすべてのルールが、KW地図盤 (#80-83) の非汎用地形盤端における進入/退出にも適用される。ただし、以下の修正を加える。盤外の全ヘクスの地表高度レベルは、同じアルファベット (もしくは同じ番号) の隣接する地図盤端ヘクスに描かれた最も低い高度レベルと同じであるとする；そのため、A2.51による盤外移動は、より低い/高い高度への移動を伴う可能性がある。A2.51とは異なり、盤端の道路が番号4、又は7にあるのなら、同じ番号の盤外ヘクスすべてを道路ヘクスと考える。



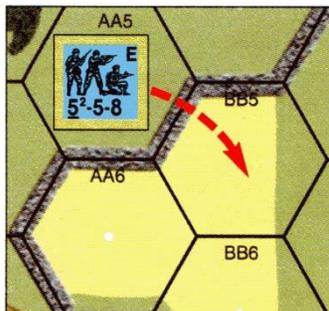
例：盤端のヘクス82K1に描かれた最も低い高度は、レベル3である。盤外ヘクス“K0” (および“K”列の全盤外ヘクス) の地表高度はレベル3であるとする。ヘクス列J、L、M、そしてNについても同様である。ヘクスO1から地図外に退出するユニットは、レベル4の岩場の盤外ヘクスに移動するものとする。盤外からヘクスK1へ進入するユニットは2重横線ヘクスサイドを横断してより高い高度レベルへ移動することになるため、その様な進入は多くの車両にとって不可能となる。



例：盤端のヘクス82A4に描かれた最も低い高度は、レベル2である。ヘクス番号4の全盤外ヘクスの地表高度はレベル2であるとする。同様に、ヘクス番号7の全盤外ヘクスが高度レベル1の道路ヘクスである。

1.2 田地 (Paddy Fields)：KW地形(W.3)が適用されている場合、すべての麦畑と水田は田地とみなす。以下に述べる特記以外、田地は水田(G8)として扱う。田地ヘクスのすべてのヘクスサイドはあぜ道(G8.21)である [例外：1.21]。SSRに明記が無ければ、田地は10~3月の間が農閑期(Drained；G8.11)、4~6月の間が水耕期(Irrigated；G8.12)、そして7~9月の間が生育期(In-Season；G8.13)である。

1.21 石垣と生け垣：プレイに使用されている石垣/生け垣を含む田地ヘクスサイドはあぜ道ヘクスサイドではない。その代りに、石垣/生け垣に関する全ルールが適用される [例外：その様な石垣/生け垣ヘクスサイドを横切するためには、追加の1MF/MPを要する；B9.4]。



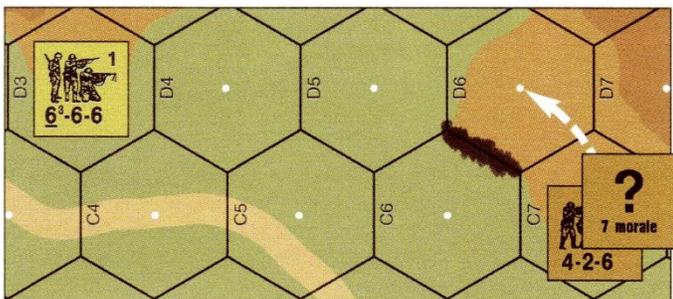
例：18AA5からBB5へ移動する5-5-8分隊は(通常の1MFの代わりに)2MF+COT消費する。完全装軌式車両に対するコストは同様に2MP+COTである。



W

1.3 険しい丘 (Steep Hills)¹¹：SSRで丘(B10.)を『険しい丘』と指定する場合がある。以下に述べる特記事項を除き、険しい丘は丘として扱う。険しい丘は1.1による盤外ヘクスにも適用される。車両は険しい丘ヘクスに初期配置／進入できない【例外：険しい丘の道路；1.33】。

1.31 隠蔽：開豁地の険しい丘ヘクス【例外：険しい丘の道路；1.33】は、歩兵（とその所有するSW）、ダミースタック、壕、そして設置された砲に対して隠蔽地形とみなす。開豁地の険しい丘ヘクスは、隠蔽の獲得／喪失に関して、開豁地とみなさない（適切な条件下ではFFMOが適用される）。



例：険しい丘が適用中である。隠蔽状態の4-2-6分隊が81D6へ警戒移動した場合、隠蔽状態は失われぬ。D3の6-6-6分隊から射撃を受けた場合、FFMOは従来通り適用される。

1.311 夜間：隠蔽地形であるにもかかわらず、開豁地の険しい丘ヘクスのMF進入コストは夜間(E1.51)に増加しない。

1.32 射撃制限：険しい丘ヘクスとその隣接ヘクス間で射撃が行われる場合、目標と射撃側の高度が異なっているなら、どちらが射撃側であったとしてもその射撃は崖ヘクスサイドを通過する(B11.31-32)ものとみなす【例外：射撃側／目標のどちらかが建物の上階レベル(B23.421)もしくは屋上(B23.421)区域にいる；射撃が道路ヘクスサイドを通過する；空中ユニットへからの射撃】。

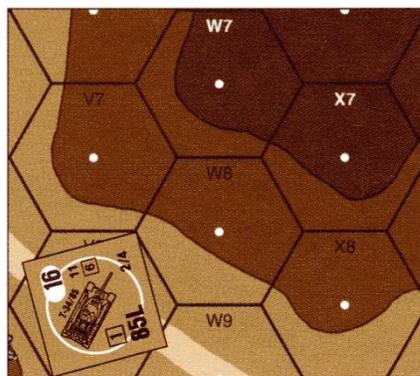
1.33 険しい丘の道路：険しい丘の道路は以下に述べる特記を除き、1車線の(B6.43-431の制限のある)道路(B3.)として扱う。険しい丘の道路ヘクスにおける、非連結の砲のスタック制限は、最大で1個である【例外：迫撃砲はこの制限に数えない】。

1.331 車両：車両は道路を利用して道路ヘクスサイドを通過することによってのみ、険しい丘の道路ヘクスに進入できる。険しい丘の道路ヘクスに進入する車両（BUであるか否かにかかわらず）には下記の移動コストが適用される：ワゴン／ソリ 1MF；完全装軌式車両 2MP；ハーフトラック 2MP；装甲車 3MP；トラック 3MP；オートバイ 1MP；アエロサン(D17.)は険しい丘の道路ヘクスに進入できない。

1.332 VCA変更：以下の事項が険しい丘の道路ヘクスに適用される。B6.431とは異なり、VCAに隣接した道路ヘクスを含む必要は無い。非道路ヘクスサイドを越えてVCAを変更する車両には、以下のコストが適用される：オートバイ1MP；+2目標サイズ(D1.75)の車両 4MP；その他すべての車両；8MF／MP（全力移動[D2.15]が可能）。加えて、このようなVCA 変更には追加の+3DRMを適用したボグ判定(D8.2)が要求される【例外：+3DRMは、+2目標サイズの車両、又はワゴン／ソリに対しては適用しない】。砲、又はトレーラーを牽引している車両は、上記のようなVCA変更ができない。

1.333 L／LL 射撃制限：険しい丘の道路ヘクスにある砲身長(C4.1)がLまたはLLのMA/SAを有する車両【例外：SPA；AA射撃可能なMA/SA】は、以下の条件に当てはまる場合、より高い高度レベルの目標に対してそのMA/SAを射撃してはならない。その条件とは、射撃側に隣接したヘクス内の丘地形をLOFが通過し、かつその丘の高度が射撃側よりも高いレベルの場合である。この制限は同じTCA内の他の砲塔搭載兵器すべてに適用される。この制限は、道路ヘクスサイドを通過する射撃には適用されない【例外：LOF が道路ヘクスサイドと非道路ヘクスサイドにつながるヘクスの足に沿って引かれている場合】。

1.34



例：9V8のT-34/85は、険しい丘によって生じる崖と同様の制限(1.32)のため、どの兵器を用いてもV7/W8へ射撃できない。また、W7/X7への射撃は、LOFが隣接するヘクスV7とW8の（ヘクスV8より高い高度の）丘を横切るため、MA/CMGを用いることができない。

例：9BB6のT-34/85は、LOFが道路ヘクスサイドを通過するため、AA7に対してMA/CMG/BMGによって射撃できる。しかし、Z6へはそのLOFがヘクスの足沿いに引かれており、かつAA6-BB6が非道路ヘクスサイドであるため、MA/CMGを用いて射撃できない。



1.334 車体遮蔽：HDマシーナリーの試み(D4.22)は、険しい丘の道路ヘクスでは不可能である。



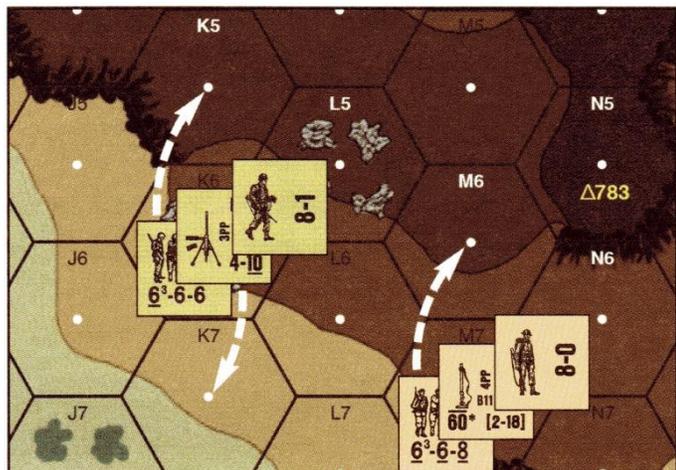
1.335 視認 TC：険しい丘の道路ヘクスにいる目標に対しての視認TC(E7.3)には、追加の-1DRMが適用される。

1.336 険しい丘の線路：以下の特記を除き、険しい丘の線路は線路(B32.)とみなす。険しい丘の道路に関するすべてのルールが険しい丘の線路に適用される。RRヘクスサイドを通過する際に車両が支払うMF/MPコスト(B32.3)は、険しい丘の線路ヘクスに進入する際、どの車種であっても1増加する。

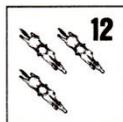
1.34 歩兵による固有 IPC以上の運搬：険しい丘ヘクスに進入する歩兵ユニット／スタックに、自身のIPC(A4.42)以上の運搬を実施中のユニットが含まれるなら、以下の事項が適用される。より高い高度の稜線(B10.4)を横切るなら、進入したヘクスの3倍のCOTを消費せねばならない。より低い高度の稜線を横切るなら、進入したヘクスの2倍のCOTを消費せねばならない。以下に述べる事項のいずれかがそのユニット／スタックに該当するなら、このようなCOTの増加は適用されない。

- 道路か小道を使用している；
- 連結された塹壕／土塁／掩蔽壕(B27.54；B27.6；B30.8)の間を移動している；
- RtRhである；
- 狂暴化状態(A15.4)である；
- DCヒーロー(G1.424)／肉弾ヒーロー(3.23)／自爆ヒーロー(6.4)である。

複数高度変更(B10.51)を行う時の中間レベルに対するコストは、険しい丘によって変化しない。



例：15K6の6-6-6がK5に単独で移動するならばコストは3MF(3×COT)であり、K7への移動には2MF(2×COT)を消費する。どちらも自身のIPC 以上を運搬中であつた稜線を横切つたためである。8-1指揮官と共にスタックで移動したなら、指揮官による分隊IPCの1増加(A4.42)のため、通常のMFコストが適用される。M7の6-6-8は、8-0指揮官と共に移動したとしても、4PPを運搬しているためにM6への移動に3MFを消費する。

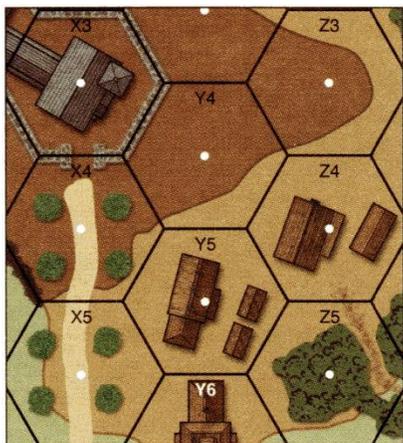


1.35 騎兵と馬：騎兵は険しい丘に存在できないが、険しい丘の道路(L.33)に道路を利用して道路ヘクスサイドを通過するのであれば進入できる（一斉突撃 [A13.62] は不可能）。歩兵/騎兵は（進入可能な険しい丘ヘクスで）馬を“率いる”ことができるが、“率いられている”のが砲/SWを積んだ駄馬(G10.1)の場合、COTが2倍となる【例外：道路か小道を用いる場合】。



1.36 砲：非車載の砲は、特に許可された場合のみ、険しい丘に初期配置できる。険しい丘ヘクスへからの人力移動は不可能である【例外：道路を使用する；同一高度レベルにある建物/道路ヘクスから建物/道路ヘクスへ移動する；

G11.76 によって洞窟へから移動する】。



例：86X4の砲はX3とX5へのみ、人力移動ができる。Y5はX4と同じ基本高度レベルではないため、不可能である。Y5の砲はZ4とY6、そして道路ヘクスであるX5へのみ人力移動できる。

1.37 野戦構築物：次の事項を険しい丘に適用する：

- ・築壕の試みに+2DRM；
- ・地雷源は不可【例外：険しい丘の道路；1.33】；
- ・トーチカは、自身のヘクスの基本高度レベルより低い高度のヘクスに、3つ以上隣接している場合にのみ配置可能。



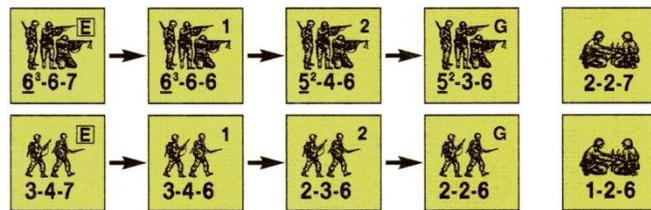
1.38 空挺部隊とグライダー：険しい丘に降下した5/8インチのパラシュートは、E9.42に従ってNMCを行わねばならない【例外：険しい丘の岩場ヘクスに降下した場合、追加の+2DRMを受ける】。1/2インチのパラシュートが険しい丘の岩場ヘクスに降下した場合、士気値7として降下MC(E9.42)を行わねばならず、このNMCに失敗した場合は（内容物とともに）除去される。険しい丘ヘクスに着陸したグライダーは、すべての搭載物とともに除去される。

例：15K6の6-6-6がK5に単独で移動するならばコストは3MF(3×COT)であり、K7への移動には2MF(2×COT)を消費する。どちらも自身のIPC 以上を運搬中であつた稜線を横切つたためである。8-1指揮官と共にスタックで移動したなら、指揮官による分隊IPCの1増加(A4.42)のため、通常のMFコストが適用される。M7の6-6-8は、8-0指揮官と共に移動したとしても、4PPを運搬しているためにM6への移動に3MFを消費する。

1.39 反斜面：険しい丘ヘクスへの非迫撃砲OBA【例外：VTFFE；W.7】には、反斜面(G14.66)が適用される。（G14.62による）LOPを引くための基準ヘクスは、SSRによって規定される。

2. アメリカ軍 (The Americans)

2.1 アメリカ陸軍¹²：KWにおけるアメリカ陸軍のMMCタイプはKW国籍別能力表に列挙されている。A25.3-34が従来通り適用される。

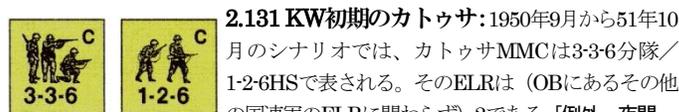


2.11 空挺部隊 (Airborne)：空挺部隊の分隊/HS(6-6-7/3-4-7)は下線付きの士気値を持つエリートクラスのユニットであり、カウンターの下落傘シンボルで識別される。戦禍やELRの置き換えによって、空挺部隊はそれ以外のアメリカ軍MMCと交換されることはなく、その逆も同様である（ゆえに、ELRを超過してMCを失敗した場合、ELRが4以下の空挺部隊の分隊は混乱した2個HSになる）。

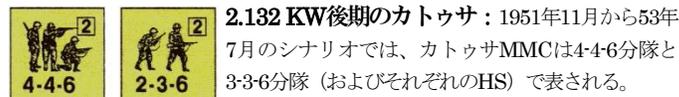
2.12 レンジャー (Rangers)¹³：レンジャーの分隊/HS(6-6-8/3-4-8)は下線付きの士気値を持つエリートクラスのユニットであり、カウンターの@で識別される。A 25.3に反して、レンジャー分隊の混乱面の士気値は統制状態面の士気値より1増加しない。戦禍やELRの置き換えによって、空挺部隊はそれ以外のアメリカ軍MMCと交換されることはなく、その逆も同様である（ゆえに、ELRを超過してMCを失敗した場合、ELRが4以下のレンジャー分隊は混乱した2個HSになる）。レンジャーの兵士はどのRPhでも自己回復を試みられ、畏縮の影響を受けず、不正規使用のペナルティ(A21.13)なしでRCL(C12.2)を使用でき、捕獲装備使用のペナルティ(A21.11-12)なしで共産軍(W.2B)のSWを使用でき、加えてコマンドウ(H1.24)である。通常の展開に加え、レンジャー分隊はNTCではなくITC(A1.31)に成功すれば、指揮官無しで展開できる。また、統合(A1.32)にも指揮官を必要としない。

2.13 カトゥサ (KATUSA)¹⁴：カトゥサ (KATUSA；Korean Augmentation to the U.S.Army) とは、アメリカ陸軍に配属された大韓民国 (ROK) 兵士のことである。特記が無い限り、カトゥサMMCはアメリカ陸軍のMMCと考える；しかし、戦禍やELRの置き換えによって、カトゥサMMCは非カトゥサMMCと交換されることはなく、その逆も同様である（ゆえに、クラス上昇したカトゥサ4-4-6、又はそのHSは、戦意高揚となる[A10.8]）。カトゥサMMCに適用される戦禍DRMは+3、指揮官誕生drmは+1である。

2.131 KW初期のカトゥサ：1950年9月から51年10月のシナリオでは、カトゥサMMCは3-3-6分隊/1-2-6HSで表される。そのELRは（OBにあるその他の国連軍のELRに関わらず）2である【例外：夜間では1；E1.22】。初期カトゥサMMCとアメリカ軍指揮官は『同盟軍(A10.7)』である。



2.132 KW後期のカトゥサ：1951年11月から53年7月のシナリオでは、カトゥサMMCは4-4-6分隊と3-3-6分隊（およびそれぞれのHS）で表される。





W

2.14 KW初期のアメリカ陸軍¹⁵：1950年6月から1950年8月のシナリオでは、アメリカ軍ユニット（および所有するすべてのアメリカ製SW/火器）に以下の朝鮮戦争初期のアメリカ陸軍ルールを適用する。

- すべての兵士【例外：ヒーロー】は鈍兵(A11.18)である；
- 弾薬減少(A19.131)が影響する；
- SWの修理ナンバーは、カウンターに表記された値に関わらず“1”である；
- OBA砲兵中隊の弾薬量は普通である(A25.33；C1.211)；
- 無線機と野戦電話の無線接触値は、カウンターに表記された値より1小さい；
- 車両/砲兵器【例外：MG】は、赤い命中ナンバーを使用する；
- AFVの固有操作班の士気値は7である；
- すべての発動機付車両のMPは赤(D2.5-51)とみなし、ゆえに機械的信頼性DRの対象となる。



2.2 アメリカ海兵隊 (U.S.M.C.)¹⁶：KWにおけるU.S.M.C.のMMCタイプはKW国籍別能力表に列挙されている。G17.1-13が適用される。5-5-8分隊とその2-3-8 HSは、再武装MMC(2.21)、後方梯隊、又はその他の特別な状況でのみ使用される¹⁷。



2.21 再武装：非武装U.S.M.C.分隊/HSが再武装(A20.551-552)した場合、U.S.M.C.5-5-8分隊/2-3-8HSにそれぞれ交換される。

2.22 地上支援：アメリカ軍OBの主要分隊タイプ(E.4)がU.S.M.C.である場合、地上支援(E7.4)の視認TCには追加の-1 DRM(E7.3)が適用される。9.113も参照。



2.3 固有操作班：アメリカ軍AFVの固有操作班の士気値は8【例外：KW初期のアメリカ陸軍；2.14】であり、アメリカ軍非装甲車両の固有操作班の士気値は7である。

3. 韓国軍 (The South Koreans)

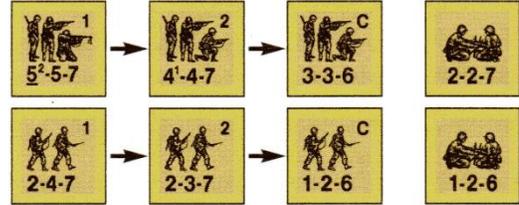


3.1 朝鮮戦争での韓国軍部隊は、大韓民国陸軍(ROKA)と大韓民国海兵隊(KMC)で表される。“ROK”は両方の部隊の総称である。ROKカウンターは特殊なツートンカラーである。ROKの兵士に適用される戦禍DRMは+3【例外：KW初期のROK；3.11】、指揮官誕生drmは0である。

3.11 KW初期のROK：1946年6月から1951年4月のシナリオでは、ROKユニット（および所有するすべてのSW/火器）に以下の朝鮮戦争初期のROKルールを適用する【例外：KMCに対しては1950年9月から適用しない】。

- すべての兵士の戦禍DRMは+4であり、戦禍による“降伏”の結果はすべて“狂暴化”とみなす。
- BAZとRCLは操作班を必用とする兵器(A21.13；C2.1)とみなされる；
- SWの修理ナンバーは、カウンターに表記された値に関わらず“1”である；
- 無線機と野戦電話の無線接触値は、カウンターに表記された値より1小さい；
- 車両/砲兵器は、どの種類の特殊弾薬(C8.)も使用できない；
- AFVの固有操作班の士気値は7である；
- すべての発動機付車両のMPは赤(D2.5-51)とみなし、ゆえに機械的信頼性DRの対象となる。

3.2 大韓民国陸軍 (ROKA)¹⁸：ROKAのMMCタイプはKW国籍別能力表に列挙されている。ROKAの1線級MMCは、クラス上昇する場合に戦意高揚となる(A10.8)；また、突撃工兵(H1.22)として指定/購入された場合には、エリートであるかのようにFTとDCを使用できる(A22.3；A23.2)。ROKAの2線級と徴集兵のMMCは鈍兵(A11.18)であり、展開できない【例外：A20.5；A21.22】。



3.21 ROKA 砲兵器：ROKAの車両/砲兵器【例外：MG】は、1951年5月からは黒の命中ナンバーを用い、それより前は赤い命中ナンバーを使用する。



3.22 ROKA OBA：ROKAのOBAで用いるチットの山(C1.211)は、1950年6月から1950年8月のシナリオならば、黒6と赤3であり、それ以降は黒10と赤3（弾薬が豊富を適用済み）を使う。また、着弾精度(C1.3)は修整後dr1以下である。



3.23 肉弾(Human Bullet；H-B)ヒーロー：1950年11月より前のシナリオにおいて、武装した統制状態のROKA分隊/HSは、G1.421-425に従って(PAATCは不要)“肉弾(H-B)”ヒーローの登場を試みるこ

ができ、関連するすべてのルールに従う【例外：MMCはDCヒーローと同様のDC起爆を実施できない】。1シナリオに登場できるH-Bヒーローの総数は、OBで与えられたROKA分隊(のみ)の50% (FRU)を超えてはならない。G1.422に従って、総許容数までのB-HヒーローをHIPで初期配置してよい。

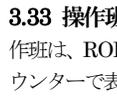
3.3 大韓民国海兵隊(KMC)¹⁹：KMCのMMCはエリートであり、通常はELR5で、戦意喪失しない。戦禍やELRの置き換えによって、KMC MMCは他のROK MMCと交換されることはなく、その逆も同様である(ゆえに、ELRを超えてMCを失敗した場合、ELRが4以下のKMC分隊は混乱した2個HSになる)。KMC MMCタイプはKW国籍別能力表に列挙されており、KCM分隊/HSの武装が日本式(3.31)かアメリカ式(3.32)のいずれの装備なのかは、シナリオの日付によって決まる。非武装のKMC分隊/HSが再武装(A20.551-552)した場合、日本式装備の4-4-8分隊/2-3-8 HSに交換される。



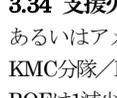
3.31 日本式装備のKMC²⁰：1949年4月から1950年7月のシナリオでは、KMC MMCは日本式装備の4-4-8分隊と2-3-8 HSで表される。



3.32 アメリカ式装備のKMC：1950年8月以降のシナリオでは、KMC MMCはアメリカ式装備の5-5-8分隊と2-4-8 HSで表される。統制状態の5-5-8は初期配置中に自由に(10%の制限を受けずに)展開してよく、加えてRPhにNTCに成功することでも展開できる。どちらも指揮官は不要である。1950年8月以降のシナリオでは、U.S.M.C. 指揮官がKMCユニットを指揮する際、その指揮修整(A10.7)は悪化しない。



3.33 操作班：2-2-8はKMCの歩兵操作班である。KMCの車両操作班は、ROKAの車両操作班とあらゆる点で同等であり、1-2-6カウンターで表される。



3.34 支援火器の使用：1951年2月より前のシナリオで、ROKあるいはアメリカ軍のMMG/HMG/軽迫撃砲/FT/BAZがKMC分隊/HSによって使用されているなら、B#/X#および複数ROFは1減少する(A.11が適用される)。ただし、それらのSWは捕獲使用ペナルティ(A21.13)に関して、操作班を必用とする兵器とは考えない。

3.35 KMCの砲兵器：ROKAの車両/砲兵器【例外：MG】は、1950年8月からは黒の命中ナンバーを用い、それより前は赤い命中ナンバーを使用する。

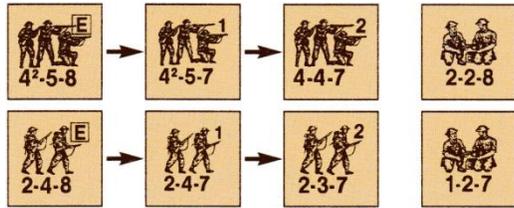
3.36 KMC OBA²¹：KMC OBAはOBAで用いるチットの山(C1.211)は、黒10と赤3（弾薬が豊富を適用済み）を使い、着弾精度(C1.3)は修整後dr2以下である。KMCのOBAは1951年1月から使用可能になる【例外：1951年1月から9月までは、60+または80+mm大隊迫撃砲OBA(C1.22)のみ使用可能】(KMC OBA使用表を参照)。



4.

4. イギリス連邦朝鮮派遣軍 (British Commonwealth Forces Korea)

4.1 イギリス陸軍および連邦陸軍²²: すべてのBCFK (オーストラリア、イギリス、カナダ、そしてニュージーランド軍) のMMCタイプはKW国籍別能力表に列挙されている; 新兵 (Gクラス) MMCは存在しないため、ELRによる置換えを被った2線級MMCは戦意喪失となる。BCFKには、A25.4のイギリス軍ルールとA25.44.46が従来通り適用される。



4.2 イギリス海兵隊コマンド²³: イギリス海兵隊 (RM) コマンドの分隊/HS(6-6-8/3-4-8)はイギリス軍の下線付きの士気値を持つエリートクラスのユニットであり、カウンターはイギリス海兵隊シンボルで識別される。戦禍やELRの置き換えによって、RM MMCは非RM MMCと交換されることはなく、その逆も同様である (ゆえに、ELRを超過してMCを失敗した場合、ELRが4以下のRM分隊が混乱した2個HSになる)。非武装のRM分隊/HSが再武装(A20.551-552)した場合、6-6-8分隊/3-4-8HSにそれぞれ交換される。RMの兵士は不正規使用のペナルティ(A21.13)なしでRCL(C12.2)を使用でき、捕獲装備使用のペナルティ(A21.11-12)なしで共産軍(W.2B)のSWを使用でき、加えてコマンドウ(H1.24)である。通常の展開に加え、RM分隊はNTCではなく1TC(A1.31)に成功すれば、指揮官無しで展開できる。また、統合(A1.32)にも指揮官を必要としない。RM/U.S.M.C.の指揮官がU.S.M.C./RMのユニットを指揮する際、その指揮修整(A10.7)は悪化しない。



4.3 カナダ自動火器ボーナス²⁴: 1952年1月以降のシナリオにおいて、カナダ軍分隊は自動火器ボーナス(A7.36)の能力を有する。

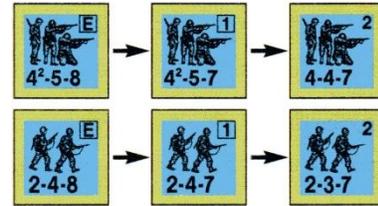
5. 他の国連軍部隊(Other UN Forces)



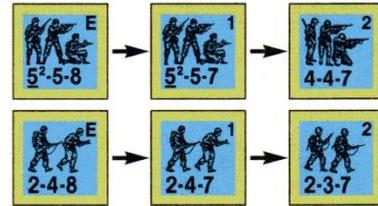
5.1 他の国連軍(OUNC)²⁵: ベルギー、コロンビア、エチオピア、フランス、ギリシャ、ルクセンブルク、オランダ、フィリピン、タイ、およびトルコは朝鮮戦争に地上軍を派遣した国連加盟国であり、OUNC (Other UN Command; 他の国連軍) とはそれらの部隊の総称である。OUNCカウンターは特殊なツートンカラーである。OUNCのMMCタイプはKW国籍別能力表に列挙されており、分隊/HSは大きく2つのグループに分類される: ボルトアクションライフルで武装(5.12)したものと、半自動火器で武装したもの(5.13)であるが、両タイプ共に同じ2線級MMCを用いる。OUNCの2線級分隊/HS (4-4-7/2-2-7) がクラス上昇した場合、UN OBに1つでも半自動火器で武装した分隊(5.13)があるなら5-5-7/2-4-7に、そうでないなら4-5-7/2-4-7に取り換えられる。OUNCの兵士に適用される戦禍DRMは0 [例外: トルコ軍; 5.11]、指揮官誕生drmは0である。非武装OUNC分隊/HSが再武装(A20.551-552)した場合、2線級4-4-7分隊/2-3-7HSにそれぞれ交換される。

5.11 トルコ軍: トルコ兵に適用される戦禍DRMは+3であり、RtPhの降伏(A20.21)は決してせず、戦意喪失もしない。加えて、修整後戦禍DRが9以上の場合、狂暴化(A15.4)する [例外: トーチカ内のトルコ兵は代りにクラス上昇(15.3)する]。

5.12 ボルトアクションライフル武装: コロンビア、エチオピア、タイ、および1951年1月から8月のシナリオにおけるベルギーとルクセンブルク軍は、ボルトアクションライフル武装のOUNC MMCで表される。徴集兵/新兵MMCは存在しないため、ELRによる置換えを被った2線級MMCは戦意喪失となる。



5.13 半自動火器武装: オランダ、フィリピン、フランス、ギリシャ、トルコ、および1951年9月以降のベルギーとルクセンブルク軍は、半自動火器武装のOUNC MMCで表される。徴集兵/新兵MMCは存在しないため、ELRによる置換えを被った2線級MMCは戦意喪失となる [例外: トルコ軍; 5.11]。



5.14 操作班: 2-2-8はOUNC歩兵操作班であり、1-2-7はOUNC車両操作班である。



5.2 銃剣突撃: エチオピア、フランス、およびトルコ軍の指揮官は、銃剣突撃NTC(W.6A)を免除される。

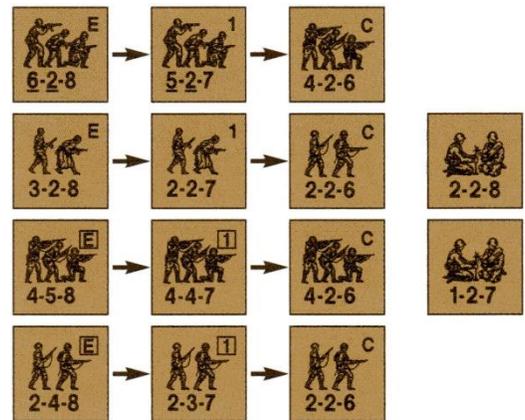


5.3 OUNC OBA: OUNCのOBAはフィリピン軍とトルコ軍だけが使用でき、チットの山(C1.211)は黒9と赤3を使う。また、着弾精度(C1.3)は修整後dr1以下である (OUNC OBA使用表を参照)。

6. 北朝鮮軍 (The North Koreans)



6.1 朝鮮人民軍(KPA)²⁶: 朝鮮戦争における北朝鮮地上部隊は朝鮮人民軍 (KPA) と呼称する。KPAは特記ない限りすべてに関してソ連軍(A25.2)とみなすが、エリート部隊(C8.2)となることはなく、SSRで指示された場合のみ海戦術(A25.23)を用いることができる²⁷。KPAのMMCタイプはKW国籍別能力表に列挙されている。KPAの兵士に適用される戦禍DRMは+2、指揮官誕生drmは+1である。エリートKPA分隊は展開(A1.31; A2.9)可能であり、統制状態のKPAエリート兵士はすべて静粛(A11.17)である。KATUSA(2.13)/ROK(3)のいずれでもない兵士がKPAの捕虜を尋問(E2)する場合、尋問DRに追加+1DRMを加えねばならない。





W

6.2 コミッサール：KPAは、1942年10月のソ連軍(A25.22-223)と同様にコミッサールを使用できる。8+1指揮官はコミッサールとして扱われる【例外：KPA指揮官が8+1コミッサールに置き換えられることはない】。

6.3 虐殺²⁸：KPAは虐殺(A20.4)が可能である。



6.4 自爆ヒーロー (Suicide Hero)：SSRで指示された場合(のみ)、武装した統制状態のKPA分隊/HSは、G1.421-425に従って(PAATCは不要)“自爆”ヒーローの登場を試みることができ、関連するすべてのルールに従う(KPA歩兵はG1.424にあるようなDCの起爆が実施できる)。1シナリオに登場できる自爆ヒーローの総数は、OBで与えられたKPA分隊(のみ)の25%(FRU)を超えてはならない。G1.422に従って、総許容数までの自爆ヒーローをHIPで初期配置してよい。



6.5 共産ゲリラ (Communist Guerillas)²⁹：共産ゲリラ分隊、HS、そして、SMCはバルチザンカウンターを用い、操作班はソ連軍の操作班を用いる。共産ゲリラはすべてにおいてバルチザン(A25.24)とみなされる。



6.6 夜間：KPA/バルチザンのMMC【例外：歩兵操作班】は星弾(1.92)を発射できない。

7. 中国共産軍 (The Communist Chinese)³⁰

7.1 中国人民義勇軍(Chinese People's Volunteer Army ; CPVA)³¹：朝鮮戦争に投入された中華人民共和国の地上軍は、中国人民義勇軍(CPVA)と呼ばれる。CPVAカウンターは特殊なツートンカラーである。CPVAのMMCタイプはKW国籍別能力表に列挙されており、分隊/HSは大きく2つのグループに分類される：介入初期(7.12)とソ連式装備(7.13)である。CPVAの1線級MMCがクラス上昇した場合、戦意高揚(A10.8)になる。徴集兵/新兵MMCは存在しないが、ELRによる置換えを被った2線級分隊は戦意喪失とならない。

7.11 KW初期のCPVA：1950年10月から1951年3月のシナリオでは、CPVAユニット(および所有するすべての製SW/火器)に以下の朝鮮戦争初期のCPVAルールを適用する。

- ・弾薬減少(A19.131)が影響する；
- ・SWの修理ナンバーは、カウンターに表記された値に関わらず“1”である；



7.12 介入初期 (Initial Intervention)：1950年10月から1951年3月のシナリオにおいて、CPVA分隊/HSは一般的に介入初期MMCで表される。

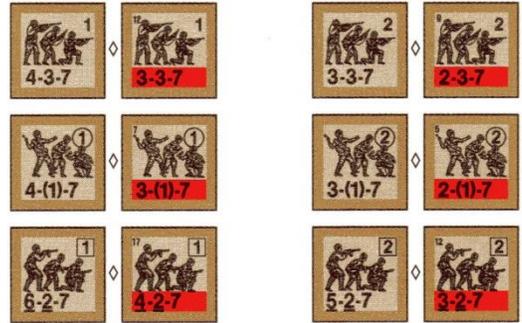


7.121 擲弾兵³²：擲弾兵分隊/HSは“(1)”の射程(A1.22)によって識別される。擲弾兵は自身の固有FPで遠距離射撃(A7.22)はできず、PBF(A7.21)の火力は2倍にならず、TPBF(A7.21-212)では(3倍ではなく)2

倍となる(A7.212は通常と同じく適用される)。擲弾兵はSW/砲を使用/修理できない【例外：SWの故意の破壊(A9.73)、MOL(A22.6)、DC(A23.)、連鎖地雷(B28.531)】。擲弾兵MMCは阻止(A10.53)できない。



7.13 ソ連式装備：1951年4月以降のシナリオにおいて、CPVA分隊/HSは一般的にソ連式装備MMCで表される。



7.2 MMC：CPVAの分隊には混乱面がない。その代りに完全戦力面と減少戦力面があり、どちらも通常は統制状態である。減少戦力面は赤い帯線で区別される。

7.21 ステップ減少(Step Reduction)³³：武装しており、狂暴化していないCPVA分隊は、IFT/付随攻撃/事前砲撃/FPFによるMCの失敗やdr1の狙撃を受けた場合、ステップ(戦力段階)が減少(1.121-122)する【例外：2線級の分隊がELRを超えてMCに失敗した場合(7.225)；損耗が生じた場合(7.24)】。混乱しない限り、ステップ減少しても釘付け/TI/CXの状態は維持され、火線/目標の捕捉も維持できる。CPVAの分隊(と歩兵操作班；7.28)だけが、ステップ減少の対象となる。

7.22 攻撃による混乱(Attack Break)：武装しており、狂暴化していないCPVA分隊がIFT/付随攻撃/事前砲撃/FPFで被ったMCに失敗する(が損耗はしていない)か、KIAの結果からの“混乱”を被る(A7.301)か、dr“1”の狙撃を受けた場合、以下のいずれかの結果(7.221-225)を適用する。

7.221 完全戦力の分隊は、ステップ減少を被る。ユニットは裏返されて減少戦力面となる。しかし、非混乱状態は維持される。

7.222 減少戦力の分隊もステップ減少を被る。ユニットは1個の非混乱状態のHSに取り換えられる。

7.223 1線級の完全戦力の分隊がELRを超えた場合、まず2線級の完全戦力の分隊に置き換え(ELRを超えたため)、その次に7.221に従いステップ減少(MCに失敗したため)を適用する。

7.224 1線級の減少戦力の分隊がELRを超えた場合、まず2線級の減少戦力分隊に置き換え(ELRを超えたため)、その次に7.222に従いステップ減少(MCに失敗したため)を適用する。

7.225 2線級分隊が(完全戦力か減少戦力かに関わらず)ELRを超えた場合、混乱したHSになる。

7.23 その他の理由による混乱(Other Break)：武装しており、狂暴化していないCPVA分隊が7.22以外の理由で混乱となった場合(例：緊急脱出/自発的混乱/オートパイの事故/空挺降下/WPのMC/対OVR射撃によるMC/パンジMC)、以下のいずれかの結果を適用する(損耗の場合は適用しない；7.24)。

7.231 完全戦力の分隊は2個の混乱したHSになる。

7.232 減少戦力の分隊は1個の混乱したHSになる。

7.233 加えて、ELRを超えて(ただし修整前DRは12ではない)MCに失敗した場合、その結果生じる1個、もしくは2個の混乱HSは、元の分隊が1線級であれば2線級に、元の分隊が2線級であれば戦意喪失となる。

7.24 損耗：理由を問わず、損耗の結果はすべてのタイプのCPVA兵士に(A7.302に従い)通常どおり適用される。狂暴化したものや非武装のCPVA分隊が混乱の結果を受けた場合、ステップ減少する代わりに損耗する。

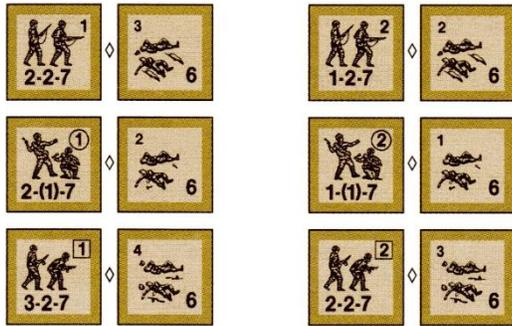


7.25 非武装：完全戦力か減少戦力かにかかわらず、CPVA分隊が非武装になった場合には通常の非武装分隊カウンターと取りかえる。非武装のCPVA分隊/HSが再武装(A20.551-552)した場合には完全戦力の2線級3-3-7分隊か1-2-7HSと取りかえる。



7.26

7.26 展開：CPVA 分隊は通常どおり展開できる【例外：減少戦力の分隊は、1個のHS としか交換できない】。7.5 項も参照。



7.27 HS：武装したすべてのCPVA HSは、通常どおり混乱し、回復する(A8.31、A10.3、A10.4、A10.6等;7.24も参照)。2個の統制状態の同一クラスのHSは、統合(A1.32)によってそのクラスの**完全戦力**分隊となる。



7.28 操作班：CPVA の歩兵操作班カウンターには、CPVA 分隊カウンターと同様に、完全戦力面と減少戦力面がある(7.2)。完全戦力の歩兵操作班が、IFT/付随攻撃/事前砲撃/PPF によって MC に失敗するか、KIA の結果からの“混乱”を被る(A7.301)か dr“1”の狙撃を受けた場合、完全戦力の CPVA 分隊と同様にステップ減少(7.21-221)する。減少戦力の歩兵操作班がステップ減少した場合、**混乱**した車両操作班となる。完全戦力か減少戦力かにかかわらず、歩兵操作班が 7.23 のような混乱(自発的混乱も含む)の結果を受けた場合にも、混乱した車両操作班となる【上記全ての例外：損耗；7.24 参照】。歩兵操作班を車両操作班に展開したり、車両操作班を統合して歩兵操作班にはできない。

CPVA の車両操作班は通常どおり混乱し、回復する(A8.31、A10.3、A10.4、A10.6 等;7.24も参照)。初期配置/進入時に**車両固有**操作班ではなかった車両操作班は、A21.22 に関し歩兵操作班とみなす。ゆえに、車両固有操作班が兵士カウンターとして盤上に置かれる場合、その ID をメモし、A21.22 の影響が出た時に備えておく。CPVA の**車両固有**操作班は通常どおり機能する(D.5 等)。



7.3 指揮官³⁴：CPVA 指揮官の階級構造は、上位から順に次のようになる：10-1、10-0、9-1、9-0、8-1、8-0、7-0、6+1。釘付け状態ではない、統制状態のCPVA 歩兵/騎兵指揮官は【例外：釘付け状態でも、**混乱**もしていない**政治将校**(7.4)がいる場合】自身の区域にいる**狂暴化**状態でないすべてのCPVA 歩兵/騎兵MMCの士気値を1増やす(A.18を適用する)。



7.31 政治将校 (Political Officers ; PO)³⁵：以下の特記事項を除き、CPVAは1942年10月のソ連軍であるかのように、政治将校(PO)をコミッサー(A25.22-223)として扱う。政治将校は**赤**の能力値(A10.7)を持つ。ユニットは政治将校による回復の際、DM 状態を**無視**できないが、DRMは通常+4(A10.62)ではなく+2となる。加えて、政治将校の指揮下で回復に失敗したユニットは、A25.222のような置き換え/損耗/除去を**被らない**。通常の指揮官を政治将校に交換することはできず、OBで具体的に登場したものでなければならぬ。

7.4 指揮統制：射撃制限(7.41)と歩兵小隊移動(7.42)の両方のルールが、すべての統制状態のCPVA分隊/HSに適用される【例外：偵察ユニット；7.5】。

7.41 射撃制限 (Restricted Fire)：統制状態のCPVA分隊/HSが、PPPh において(あるいは待機射撃で;A7.25)非『隣接』目標に対して射撃する場合、それは地域射撃(A7.23；C.4)とみなされる【例外：その攻撃が指揮官の指揮を受けている場合；A7.53】。

7.42 歩兵小隊移動 (IPM)³⁶：MPhにおける統制状態のCPVA歩兵分隊/HSは、IPMグループ(7.421)でのみ移動できる【例外：進入(7.4222)；非IPM 移動；(7.423)】。ダミーやその他の統制状態のCPVA歩兵ユニット(例えば、操作班、SMC、偵察ユニット[7.5])は通常はIPMの対象とならないが、IPMグループへの参加を宣言することは**可能**である。

7.421 IPMグループ：CPVAがフェイズプレイヤーである場合、MPhにおいて、1つ以上のIPM参加MMCと1つ以上の指揮官によって構成されるIPMグループを指定できる。グループ内のすべてのユニットは『隣接』区域でつながっており、統制状態で、移動の自由があり、加えて**彼ら自身のMPh**をまだ開始していないことが条件である。指揮官はIPMグループに参加して移動するか、あるいは1つの指揮官でMPhにつき1つのIPMを生成するだけの役目を果たすことができる。1つの指揮官は、IPMグループへの参加/の生成を、MPhにつき1グループについてのみ実行できる。IPMに参加した指揮官は、たとえIPMグループの一部ではなくなっても、そのIPMグループ内の**すべての**ユニットに指揮官ボーナス(A4.12)を与える。IPMグループの生成は**隠蔽**を失う行動(A12.141)ではなく、そのMPhでの指揮官の移動による制限も与えない。IPMグループが作られたら、参加するユニットは7.4221によってのみIPMグループの一部ではなくなる。

7.422 歩兵小隊移動のシステム：IPMグループはインパルス移動(D14.3)を用いる。特記のない限り、すべてのインパルス移動ルールが適用される。IPMグループ内の各ユニットは(可能な限り)各インパルスの終了時(インパルスの途中ではない)にIPMグループ**全体**が、単一の連続した隣接ヘクス/区域の連鎖になるよう移動せねばならない。IPMグループは、警戒移動(A4.61)と急速歩移動(A4.5)を通常どおり宣言できるが、グループ全体に対してのみ宣言でき、そのグループ内のすべてのユニットに影響する。鉄条網の下(B26.4)への移動を試みる場合、IPMグループ内のユニットは個別に**退出dr**を行う。

IPMグループ内のユニットは、以下のことができない：

- なんらかの輸送手段に乗る/乗車する；
- ダッシュの宣言(A4.63)；
- 索敵(A12.152)；
- DC 設置(A23.7)；
- 地下道(B8.1)/トンネル(B8.6)/洞窟/複合洞窟(G11.)への進入；
- 登攀(B11.4)
- なんらかのタイプの撤去の試み(B24.7)；
- 砲の連結/切り離し(C10.11；C10.12)；
- 砲の人力移動(C10.3)；
- 水泳(E6)

7.4221 間隙：IPMグループのユニットが、除去、混乱、釘付け、または狂暴化した場合、現在のインパルス終了の時点で、そのユニットはIPMグループの一部ではなくなる。IPMグループの残りのユニットが7.422の要件を満たせない場合、(現在のヘクスで自身のMPhを終えるのでなければ)次のインパルスの終了時点で要件を満たすように移動しなければならぬ；それができなかった場合、そのグループは直ちに移動を終了し、参加しているすべてのユニットは現在の区域で自身のMPhを終える【例外：進入；7.4222】。IPMを実施中に**負傷**(A17)したSMCは、現在のインパルス終了時点で自発的にIPMグループの一部ではなくなることができ、その場合現在の区域で自身のMPhを終了する。

7.4222 進入：統制状態のCPVA歩兵ユニットは、盤上に進入するプレイヤーターンにはIPMを実施する必要はないが、IPMを選択してもよい。盤上に進入するプレイヤーターンの間、7.4222に関してIPMグループの盤外ユニットはすべてのユニットが盤上にいるかのように、グループの他のユニットに隣接しているとみなされる。進入するターンに**間隙**(7.4221)が発生し、IPMグループが次のインパルスの終了時に7.4222の要件を満たせない場合、その進入グループは自動的に移動をやめることは**ない**。しかし、最も長い連続した隣接ヘクス/区域の連鎖(そのような連鎖が複数存在する場合はプレイヤーが選択する)の一部になっていない盤上ユニットはグループの一部ではなくなり、現在の区域で自身のMPhを終了しなければならぬ。また盤外にあるユニットは(あたかもグループの一部であるかのように)移動を続けてもよいが、盤上に進入した最初のヘクスで自身のMPhを終了しなければならぬ。ただし、現在においてグループの他のユニットと隣接しているのであれば、そのグループの一部として移動を継続できる。



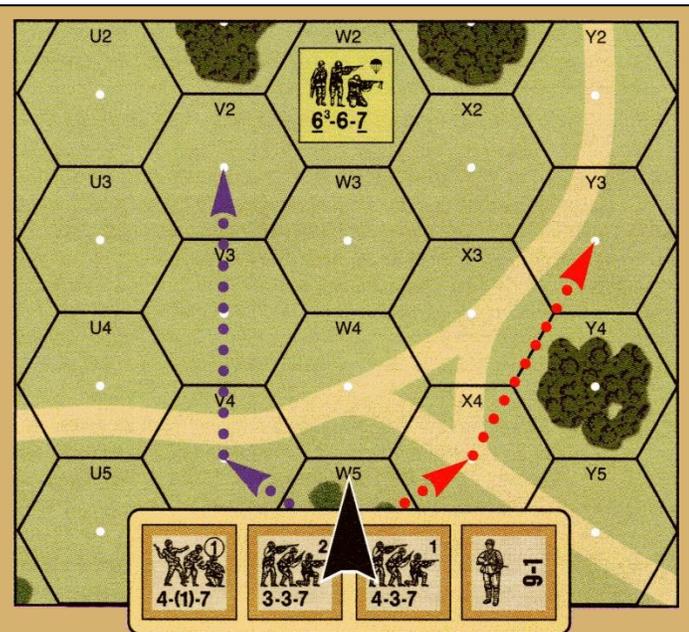
W

7.4223 退出: IPMグループに属するユニットがインパルス中に盤外に退出し、そのグループの他のユニットが盤上に残っている場合、7.422-4.2211に関して、退出したユニットはそれが最後に盤上にいたヘクスに、MPHを通じて存在し続けている【例外：オーバースタック(A5.11)は適用しない】とみなす。

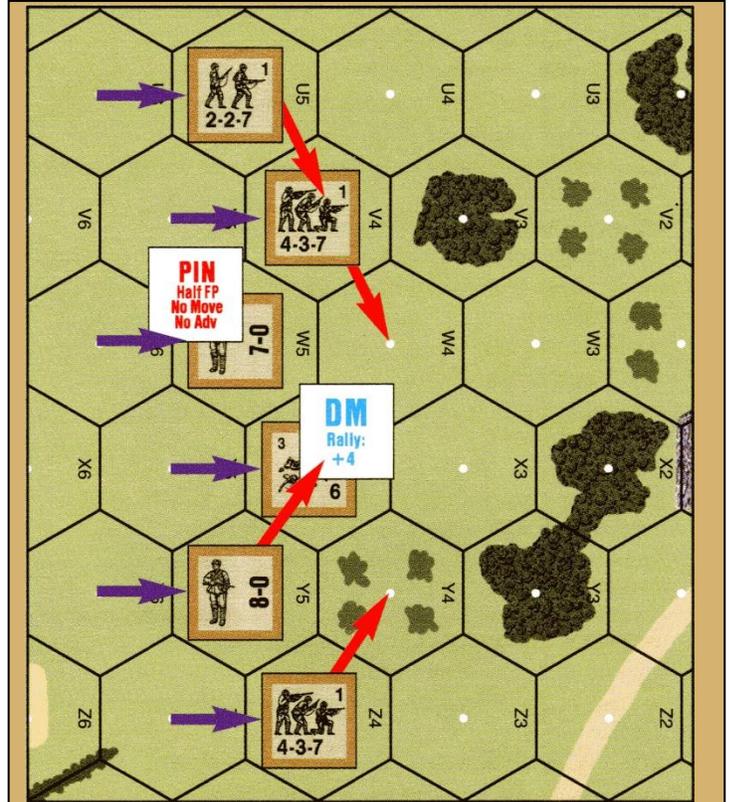


7.4224 狂暴化: IPMグループ内のユニットが狂暴化(A15.4)した場合、そのグループの移動は現在のインパルス終了後に一時的に中止となる。狂暴化ユニットの襲撃(A15.43)が終了した後、そのIPMグループは自身のMPHを再開する。

7.423 非インパルス移動: 統制状態のCPVA分隊/HSがIPMを用いずに移動しようとするなら、自身のMPHの開始時にNTCに成功する必要がある【例外7.4231】。このTCは狙撃兵(A14.1)/ブービートラップ(B28.9)攻撃を発生させず、隠蔽を喪失する行動(A12.141)にもならない。夜間シナリオでは、このTCに+1DRMが適用される。7.81も参照。このNTCに失敗した場合、そのユニットはこのMPHに1区域しか移動できず【例外：狂暴化；迷走】、他のユニットの移動の前に移動を実行せねばならない。



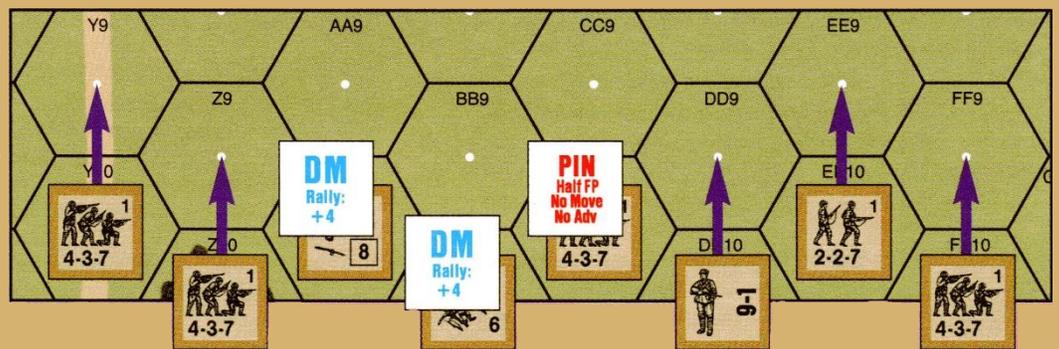
7.423 非 IPM 移動の例: 19W5 の指揮官は 4(1)-7 分隊 1 個で構成された IPM グループ(7.421)を生成した。4(1)-7 分隊は、1 個分隊でのインパルス移動で V4 を経由し、V2 へと移動した。この時点で、指揮官は IPM に参加することも別の IPM グループを生成する事(7.421)もできない。そこで指揮官は 4-3-7 分隊とともに、X4 を経由し、Y3 に移動した(7.4231 黒点 2)。3-3-7 分隊は通常移動するための NTC を試みることができるが、失敗した場合 1 区域しか移動できない(7.423)；1 区域だけであれば、NTC なしでどの方向にも移動できる(7.4231 黒点 1；これを望むのであれば、NTC を失敗しても実害はない)；あるいは、(LOS 内の敵 MMC を含む) W2 を目標ヘクスに指定し、その方向に移動できる(7.4231 黒点 13a)。



7.4221 間隙の例: 第1インパルスに、IPMグループの全ユニットは1MFを消費して(青矢印で示した)1ヘクスを移動する。防御臨機射撃は44W5の7-0指揮官を釘付けにし、X4の2-2-7HSを混乱させた。釘付け状態の指揮官と混乱状態のHSは、現在のインパルス終了時にグループの一員ではなくなる(7.4221)。次のインパルスで、CPVA プレイヤーは、グループの残ったユニットを、隣接ヘクスで連続した1つのグループを形成するように移動させなければならぬ。例えば、赤矢印で示したような移動である。

もし防御臨機射撃がV4の分隊も釘付けにしていたなら、次のインパルスの終了時に隣接ヘクスで連続した1つのグループを形成できず、次のインパルスの終了時に、グループが自由に移動を終了することになる(7.422)。隣接ヘクスで連続した1つのグループを形成できないのであり、CPVAプレイヤーはグループの残りのユニットをIPMのいかなる制限もなしに自由に移動させられる。

7.4222 進入の例: このIPMグループに属するすべてのユニットが、自身の**第1インパルス**に盤外から盤上に、2MFを消費して(19Z10の疎林のため)進入した。防御臨機射撃がAA10の8-0指揮官とBB10の2-2-7HSを混乱させ、加えてCC10の4-3-7分隊を釘付け状態にした。それらは、もはやグループの一員とはみなされぬ。



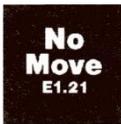
第2インパルスに、IPMグループの残り5ユニットが移動を再開する。それらが連続した1グループに再構成可能なら、そのように移動せねばならない。今回は不可能なので、青矢印のように移動した。このグループが盤上から移動を開始していたなら、第2インパルスの後5ユニットすべてが移動を終了する。なぜなら、間隙が生じた次のインパルス終了時に、隣接ヘクスで連続した1グループを形成できていないからである(7.4221)。しかし、今回は盤外進入したターンのため、すべてのユニットが移動を終了する必要はない。Y9とZ9の4-3-7分隊2個だけが、自身のMPHを終了する。なぜなら、それらは“最も長い連続した隣接ヘクスの連鎖”(7.4222)の一部ではなく、ゆえにグループの一員ではなくなるからである。他の3ユニットはグループとして移動を続けてよい。



7.4231

7.4231 免除：統制状態のCPVA分隊/HS が7.423のTCを免除されるのは、以下のいずれかの項目に該当する場合である：

- ・自身のMPHに1 区域以下の移動を行う；
- ・指揮官とスタックして最初から最後まで自身のMPHを費やした；
- ・盤外からの進入(7.4222；A2.5)；
- ・自身のMPHの最初のMF消費として、なんらかの輸送手段に乗る/乗車する；
- ・なんらかの輸送手段から降りる/降車する；
- ・DC/FTを1つ以上所有している；
- ・突撃工兵(H1.22)、工兵(B28.8；H1.23)、やコマンドウ(H1.24)のいずれか；
- ・戦意高揚状態(A10.8)；
- ・秘匿されている(E1.4)；
- ・進入する最初の区域が地下道(B8.2)/洞窟/複合洞窟(G11.1)区域である；
- ・トンネルに進入する(B8.6)；
- ・自身のMPHで進入するそれぞれのヘクスが、壕、トーチカ、洞窟のいずれかを含んでいるか、あるいは洞窟の出入り口ヘクスである；
- ・自身のMPH開始時に、「目標」ヘクスを指定する。MPHに進入する新たなヘクスは「目標」ヘクスへの距離（ヘクス数で数える）を縮めるか、それに隣接するものでなければならない（盤外退出を含む；A26.23）。「目標」ヘクスにはLOSがなければならず、加えて；
 - a) 確認状態の敵MMC/車両を含み、かつ4ヘクス以内である；
 - b) 乗る/乗車可能な自軍輸送手段を含み、かつ3MF以内である；
 - c) VCヘクス（又はVC区域/建物を含むヘクス）(A26.1)；
 - d) 除去とみなされずに退出できる(A26.221)盤端のヘクス。



7.424 夜間のIPM：CPVAの秘匿カウンターはIPMグループに参加できるが、参加するユニットのすべてが秘匿(E1.4)されている場合に限られる。IPMグループのユニットが秘匿を喪失したなら、そのIPMグループのすべてのユニットが秘匿状態を喪失する（ダミー秘匿カウンターは除去される）。それぞれのユニットは隠蔽状態で盤上に置かれる【例外：その他の理由で隠蔽を喪失する状況であれば、非隠蔽状態である】。7.71参照。

7.4241 迷走：IPMグループは全体で1回だけ移動DR(E1.53)を実施する。E1.531の例外がIPMグループに適用されるのは、参加する指揮官/もしくは参加ユニットの50%以上に該当する場合である。IPMグループ内のユニットが(E1.53のため) TI 状態になったら、そのグループに属する全ユニットがTI状態となる。E1.532に関して、IPMグループ内のユニットは「統制状態にある自軍ユニット」とはみなされない。E1.532がグループに参加するいずれかのユニットに適用されたら、グループのすべてが迷走から解放される。

7.5 偵察(Recon)ユニット³⁷：CPVA分隊/HSは、SSRで“偵察”ユニットに指定される場合がある。偵察分隊/HSには、以下のルールが適用される：

- ・通常の展開能力に加え、偵察分隊はNTC(A1.31)の代りにITCを成功させることで、指揮官なしで展開できる；
- ・統合に指揮官を必要としない(A1.32)；
- ・偵察HSは偵察ユニット以外のHSと統合できない；
- ・偵察分隊/HSは指揮統制(7.4)の制限の対象ではない；
- ・非武装となった偵察分隊/HSは偵察ユニットではなくなる。



7.6 HS歩兵OVR：武装した、狂暴状態でない1個分隊以上のCPVA歩兵MMC（およびスタックして共に移動するSMC）は、単独で存在する確認状態の敵HSに対し、歩兵OVRを試みることができる；ただし、OVRに参加するユニットの印刷された固有FP(A1.21)の合計が、敵HSのそれ（混乱状態でもこの判定上は非混乱状態の印刷された固有FPを有しているときのみ）以上でなければならない。特記のある場合を除き、歩兵OVR(A4.15)に対するルールがすべて適用される。敵のHSは別のヘクスへの退避を選択できない。発見(A12.15)は従来通り適用される。

W



7.7 夜間：CPVAのMMCは星弾(E1.92)を発射できない【例外：歩兵操作班】。CPVAの偵察(E1.23)には+1drmが適用される。CPVAユニットは恐慌射撃(E1.55)の対象外である【例外：鈍兵の場合；A11.18】。7.96参照。

7.71 KW初期の夜間CPVA³⁸：1951年4月より前（同年3月以前）のシナリオでは、E1.31とは異なり、CPVAの歩兵ユニット/スタック、又は4以下のMMCが参加しているIPMグループ(7.421)は、すでに照明された区域で非警戒移動を実施しても、隠蔽状態を喪失しない。その様なユニットは隠蔽状態を維持する；しかし、秘匿状態(E1.31；7.424)は維持できないため、代わりに隠蔽状態で盤上に置かれる（ダミー秘匿カウンターなら、除去される）。以下のいずれかの項目が適用されたなら、通常と同じく隠蔽を喪失する：

- ・その区域が統制状態の敵地上ユニットから基本NVR以内で、かつLOSがある；又は
- ・ユニットが危険な移動(A4.62)を行う；又は
- ・ユニットが自身のIPCを超えた運搬を行う；又は
- ・ユニットが区域に進入する以外の活動、もしくは壕に出入りする目的でMFを消費する；又は
- ・軍隊ラッパ(7.8)が鳴ったプレイヤーターンである。

7.8 軍隊ラッパ (Bugles)³⁹：SSRに特記がある場合、CPVAは軍隊ラッパを鳴らすことができる。CPVAのMPH開始時に、1つ以上の統制状態のCPVA指揮官が盤上にある場合（あるいは進入のために盤外配置されている場合；A2.25）、CPVAプレイヤーは軍隊ラッパを鳴らしたことを宣言できる。軍隊ラッパの音は、恐慌射撃(E1.55)に関して、CPVAユニットへの攻撃によって置かれた発射光(E1.55)と同等とみなし、星弾/照明弾/サーチライト(E1.91；10.5)の最初の使用の要因となる。軍隊ラッパの影響(7.81-82)はそ現在のプレイヤーターンの間継続して適用される。軍隊ラッパは、連続したプレイヤーターンで再度使用できる。軍隊ラッパは、昼間と夜間シナリオの両方で使用できる。



7.81 CPVAへの影響：軍隊ラッパが鳴ったプレイヤーターンを通じ、すべてのCPVA分隊/HSは非IPM移動のためのTCに、-1DRM(7.423)を受け、加えてすべてのCPVAユニットは追加の+1隠蔽獲得drm(A12.122)を受ける。



7.82 UNへの影響：軍隊ラッパが鳴ったプレイヤーターンにおいて、UNのシナリオ防衛側の最優良指揮官は、E1.21による移動の自由を得る試みに-1drmを受ける。1950年10月から1951年3月のシナリオでは、軍隊ラッパが鳴った非フェイズ側プレイヤーターンのU.S./ROK/OUNCに対し、以下の事項が適用される。昼間シナリオ、および夜間シナリオにおいて移動DRを必要としない場合(E1.531)であっても、CPVAの地上ユニット/スタックがMPHに新たなヘクスに移動しようとする場合には、防衛側の恐慌射撃を判定する目的のみ、それらのユニット/スタックのMPH開始時にCPVAプレイヤーは迷走DRを行う；そのようにして移動したユニット/スタックが、移動中に実際に移動DRの対象となった場合(E1.531)、そのDRによって恐慌射撃は発生しない。恐慌射撃(E1.55)の判定に関してのみ、非フェイズプレイヤーの各U.S./ROK/OUNCユニット/スタックは、静粛(E.4；E1.6)なら標準、標準なら鈍兵であると考えられる。

7.9 雑則⁴⁰：統制状態のCPVA兵士は静粛(A11.17)である。CPVAの兵士に適用される戦禍DRMは+1、指揮官誕生drmは0である。統制状態のUN歩兵ユニットに隣接していない場合、戦禍による“降伏”の結果はすべて“狂暴化”とみなす。CPVAユニットは、跨乗兵(D6.2)になれず【例外：騎兵；オートバイ】AFVによる援護(D9.31)もできない。UNユニットがCPVAの捕虜を尋問(E2.4)する場合、尋問DRに追加+1DRMを加えねばならない。民間人の情報(E2.4)がCPVAに常に適用される。SSRに特記なければ、CPVAは友好国である。



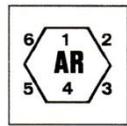
7.91 兵器の使用：CPVA兵士は捕獲使用(A2.11-12)ペナルティ無しで、ソ連/日本/G.M.D.のSW/砲/車両を使用できる。MMG/HMG/軽自撃砲/BAZ/RCLがCPVA分隊/HSによって使用されているなら、B#/#Xおよび複数ROFは1減少する(A.11が適用される)。ただし、それらのSWは捕獲使用ペナルティ(A2.13)



W

に関して、操作班を必用とする兵器とは考えない。シナリオの開始時にDC/FTを所有している（あるいは突撃工兵[H1.22]として指定/購入された）CPVAの1線級MMCは、エリートであるかのようにFTとDCを使用できる(A22.3;A23.2)。そのような分隊から生じた1線級HSはこの能力を維持するが、統合された場合には失う【例外：2個の突撃工兵HSの統合】。

7.92 築壕⁴¹：CPVAユニットは築壕時に1DRMの特典がある。このDRMは捕虜になったときには適用されない。



7.93 砲兵器とOBA：CPVAの車両/砲兵器【例外：MG】は、赤い命中ナンバーを使用する。CPVAのOBAは、1951年6月から使用でき、用いるチットの山(C1.211)は、1951年6月から1952年9月のシナリオならば黒7と赤3であり、それ以降は黒7と赤2を使う。また、着弾精度(C1.3)は修整後dr1以下である。

7.94 士気：CPVAは(A12.41を含め)PAATCと歩兵OVR【例外：HS歩兵OVR；7.6】のためのNTCを必要としない。非混乱状態のCPVAはLLMCをLLTCとして扱う。



7.95 隠蔽⁴²：CPVAの歩兵は隠蔽獲得dr(A12.122)に1drmを受ける。A12.122によって獲得できる隠蔽に加え、隠蔽地帯にいるCPVAの歩兵は、非混乱状態の敵地上ユニットのLOS内にあっても、隠蔽獲得drを実施できる。ただし、そのCPVAの歩兵に対する攻撃が実施されたと仮定したとき、LOSを有するすべての敵ユニットが少なくとも+2妨害DRMを被る状態ではなければならない。

7.96 HIP：昼間シナリオでは、CPVAプレイヤーは常に、盤上に初期配置する分隊相当数(A5.5)の10%以下(FRU)のMMCと、それにスタックするSMC/SWをHIPできる。また、夜間シナリオでは常に(シナリオ防御側でなくても)、盤上に初期配置する分隊相当数(操作班を含む)の25%以下のMMCをHIPでき、さらにシナリオ防御側であれば、OBにある分隊相当数と同数のダメージカウンターを受け取る。E1.2はそのまま適用する。上記のHIPの資格は、その他の理由で与えられるHIP【例外：E1.2】に加えて与えられる。昼間シナリオにおいても、CPVAが隠蔽地形に初期配置した単独壕/土塁には、E1.16が適用される。



7.97 CC：混乱していないCPVAの歩兵/騎兵ユニットが1個以上フェイズプレイヤー側としてCC/混戦に参加するか、CCにおいて不意打ちに成功した場合、そのCC/混戦は自動的に格闘戦(J2.31)になる。逆に不意打ちを受けたり、離脱の試みを行う場合や釘付け状態では格闘戦にはならない。車両/PRC/トーチカ内のユニットに対して格闘戦CCを行うことはできず、逆にそれらのユニットが格闘戦を行うこともない。攻撃を行うすべてのCPVA歩兵/騎兵が釘付け状態/非武装でない限り、CPVAによる格闘戦CCの攻撃には、追加で1DRMを適用する。減少戦力面のCPVAユニットは、完全戦力時と同等のCCVを維持する。

7.98 戦闘継続能力：完全戦力から減少戦力へのステップ減少はCPVAの損害記録値の計算に組み込まれない。完全戦力又は減少戦力の歩兵操作班が何らかの理由により車両操作班と取り換えられた場合、損害記録値の計算上では分隊がHSに損耗したのと同様に処理する(A16.11)。

7.99 VP：CPVAの敵側は、完全戦力の分隊/歩兵操作班が減少戦力になったり、減少戦力の歩兵操作班が車両操作班になることによってCVPを得ることはできない。

8. KW 航空支援(KW Air Support)⁴³



8.1 航空機⁴⁴：特記のない限り、戦闘爆撃機(E7)の全ルールがFB50とADスカイレイダーに適用される。どちらのMGも、その基本TKナンバーはAP破壊表(C3.71)の“44F”欄にある“6”である。

8.11 FB 50の帰還：修整前視認TC DRが11以上【例外：1950年6-8月のシナリオでは9以上】であった場合、そのFB50はE7.31に従ってそのフェイズ終了時に帰還(E7.24)する。

9.11



8.12 ADスカイレイダー⁴⁵：E7.42とは異なり、ADスカイレイダーは爆弾投下後、自動的に裏返されない。爆弾による攻撃時にROF (C2.24；ADスカイレイダーは黒の四角に囲まれた黒字の“3”で表記された、“3”の爆弾用ROFがある)が維持されているなら、裏返されない；しかし、現在のフェイズで再度爆弾攻撃はできない。

8.2 ナパーム：1950年9月から、UNのFBは常に【例外：8.3】ナパーム(G17.4)を使用できる。盤上へ進入(E7.2-21)する際、UNプレイヤーは各FBがHE、ナパームのどちらで武装するかを秘密裏に記録する。

8.3 VT信管の爆弾(VT-Fuzed Bombs)⁴⁶：1950年9月以降のシナリオにおいて、SSRで指示された場合にのみ、UN FBはVT爆弾を搭載できる。VT爆弾はHEやナパームに交換できない。特記のない限り、VT爆弾はW.7A-7Cが適用される事を除き、すべての点でHE爆弾(E7.42)として扱われる。航空機によるVT爆弾攻撃は、常に地域目標タイプを用いなければならない；しかしながらE7.422とは異なり、使用するIFTコラムは、爆弾のHE相当から1つ左の欄となる。

例：FB50は地域目標タイプを使用して爆弾(通常の150mmHE爆弾)を投下した；命中後の解決は(E7.422に従って)爆弾のFPの半分(15FP/12FPの欄)を用い、IFT上で行われた。VT爆弾同様の攻撃を実施した場合、24FPの欄(通常爆弾のHE相当[30FP]の1つ左)で解決される。150mmVT爆弾のCHは36FPの欄を用い、-1ボーナスDRMを適用してIFT上で解決される(24FP×2[CH]=48；48-36=12；12÷8=1.5)(C.7)。※訳注：CHの場合、地域目標タイプによる火力減衰前の火力が2倍にされるので、60FP-36FP=24；24÷8=3で、36FP-3ボーナスDRMが正しいと思われる。

8.4 AFV認識範囲(AFV Immunity Zone)⁴⁷：1950年11月以降のシナリオにおいて、理論的に航空機に視認(E7.25)される非隠蔽状態のUN AFVが存在するヘクスとそれに隣接するヘクスすべては、誤認攻撃による攻撃を受けない(E7.32；E7.62)。視認TCが誤認攻撃の結果の場合、UNプレイヤーはその誤認攻撃が解決されるまで自発的に隠蔽を取り除くことができない。誤認攻撃の最初の目標は、すべての認識範囲の外側で、最も近い(ヘクス換算で)非フェイスプレイヤーの隠匿状態ではない盤上地上ユニットとなる。観測機による誤認攻撃(E7.62)が生じた場合、FFEを最初に配置するヘクスは、そのFFEの着弾地域の一部が認識範囲に入るような位置であってはならない(正確に着弾しなかったことによって[C1.3-31]FFEの最終的な位置が認識範囲内になることはあり得る)。FFEが正確に着弾せず、加えて選ばれた目標が認識範囲内に移動した場合、FFEはそのユニットへ向けて修正することができる。次ページの例を参照；9.114も参照。

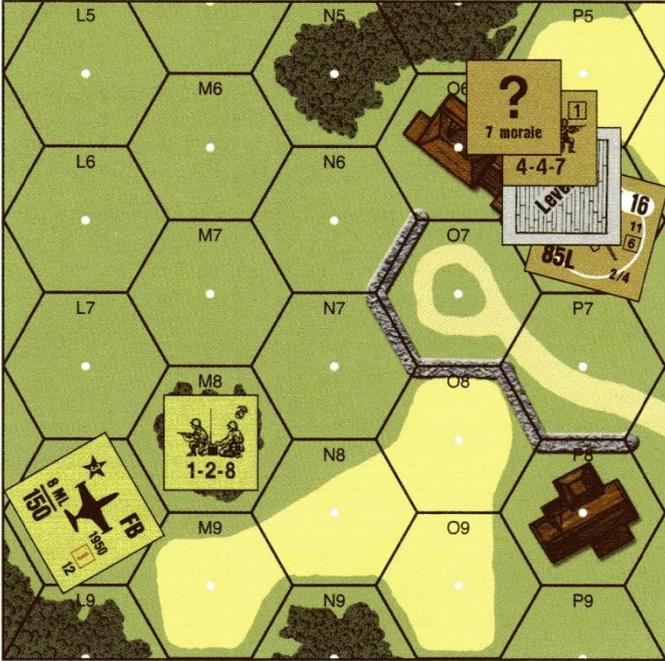
8.5 制限区域⁴⁸：SRカウンターのある/に隣接するヘクス、あるいはFFE着弾地域内のヘクスは、航空機が地上支援攻撃(誤認攻撃も含む；E7.32)中に移動する5-8ヘクスに含まれてはならない。※訳注：航空機が支援攻撃時に移動するヘクスは4ヘクスで、5-8はその4ヘクスを示していると思われる。なぜ5-8の表記なのかは不明。

9. 前線航空管制官と近接航空支援⁴⁹

9.1 前線航空管制官⁵⁰：前線航空管制官(FAC)は特殊装備と地上支援攻撃を指揮するため訓練されたユニットを表している。FACには3タイプある：U.S.M.C. 戦術航空統制班(TACP)(9.11)、盤外U.S.M.C. TACP(9.12)、空中FAC(9.13)である；3つすべてが同様の方法で機能する。UNプレイヤーだけがFACを使用できる。



9.11 U.S.M.C. TACP⁵¹：U.S.M.C. TACPは、膝をついて無線を操作する2名の兵士が描かれたMMCカウンターで表す。TACPは他に特記のない限り、歩兵操作班に相当する。TACPはいかなるSW/砲も所有できない【例外：固有無線機；9.111】し、固有操作班になることもできない【例外：TACP Jeep(国連軍車両ノート31)】。野戦電話を操作するのであれば、TACPはHIPを用いて盤上に初期配置できる。TACPのCCVは3である。



例:FBがM8のTACPの指揮無しで4P6を攻撃したとすると、視認TC(E7.3)は最初の目標ヘクスで最も視認しやすい、地上レベルのT-34/85に対して行われる。視認TC DRMは+1(+3[目標は建物内]+1[目標が航空機のLOS内でHIPではない、自軍MMCの4ヘクス以内にある]-1[目標が車両]-2[目標が隠蔽状態ではない])。TACPが指揮する攻撃なら(例えば、PFPh中の攻撃なら、FBはTACPの指揮下でなければならない(9.2))、視認TCは(TACPがLOSを引けるP6内の唯一の目標である)レベル1の隠蔽状態の4-4-7分隊に対して行われ、+2TC DRMが適用される。(+3[目標が建物内]+1[目標が航空機のLOS内でHIPではない、自軍MMCの4ヘクス以内にある]-2[TACPの指揮])。+3煙幕カウンターがTACPのヘクスにあったなら、TACPの指揮による-2DRMは-1に減らされることになる(9.113)。

10. サーチライト (Searchlight) ⁵³

10.1 サーチライト: サーチライト(SL)はUN部隊だけが使用可能である。サーチライトには3タイプある:地上設置型(10.11)、トラック搭載型(10.12)、およびAFV搭載型(10.13)である。



10.11 地上設置型(Ground-Mounted)サーチライト: 地上設置型サーチライト(GMSL)は砲架車に取り付けられたサーチライトを表しており、操作班操作(A21.13; C2.1)“兵器”とみなされる。SL CAカウンターが乗せられない限り、SL CA(C3.2)は、砲身と同様にカウンターの右下隅を示したトレーラーヒッチを基準にする。GMSLを操作する操作班/HSはスタックに関して1個分隊相当とみなされる(A5.5)。GMSLは2VPの価値があり、建物、小屋、瓦礫、ジャングル/竹林、水障害、沼沢地、および水耕期の水田(G8.12)を占めることができない。GMSLが恒久的に使用不能になった場合、直ちにゲームから取り除かれる。GMSLは、100mm以下のQSU砲(C10.13)であるかのように、人力移動(C10.3)や牽引(C10.1)を行ってよい【例外:設置;10.111】。GMSLは牽引状態の時に点灯(10.2)してはならない。GMSLとそれを操作する歩兵は、車両と同様に隠蔽を喪失する。

10.111 設置: GMSLは、砲と同様に設置状態で初期配置(A12.34; C11.2-3)可能であり、操作する歩兵は同様に+2TEMを受ける。

10.112 GMSLに対する攻撃: 牽引されていないGMSLは、(操作されているなら)固有の操作班のいる、走行不能(D.7)の非装甲車両(D1.21)【例外:走行不能の結果は効果なしとみなす】として攻撃を受けるが、不意打ちに関しては車両とみなさない。牽引状態であれば、GMSLは被牽引車両(C10.41)として攻撃を受ける。現在点灯(10.2)しているGMSLだけが狙撃目標の対象(A14.2)となる;“1”の狙撃攻撃はSLを故障させ“2”は操作している歩兵を釘付けにする。

例:GMSL(アメリカ軍2-2-7歩兵操作班で操作されている)とアメリカ軍6-6-6分隊がKPA4-4-7

分隊と混戦状態である。CCの順序(A11.31)に関して、GMSLは車両として扱われる。KPAプレイヤーはGMSLへの攻撃を選択した。CCVIは5、CC DRM は-1(-1[機能するMGが無い]-3[非装甲車両]+3[随伴歩兵2-2-7操作班と6-6-6分隊])。CC DR5以下でGMSLは取り除かれ、6以上であれば効果なしとなる。※原文ルールに混乱が見られる。車両として扱えとあるが砲のように設置が可能であり、操作する歩兵は固有操作班として扱えとありながら、「歩兵」のごく設置による+2TEMを受けられ、さらにはCC時に随伴歩兵となる記述がある。

10.113 DYO: GMSLのBPVは“25”である(歩兵操作班を含む;H1.3)。



10.12 トラック搭載型サーチライト: カウンター左下隅に“SL”と書かれたトラック(D1.15)は、トラック搭載型サーチライト(TMSL)である。特記のない限り、サーチライトはすべてに関してトラックのMA(D1.3)とみなす。SL CAとVCAが一致している場合、TMSLはIBレーン(10.2)を設定できない。

10.121 狙撃兵: TMSLが、自身のSLを点灯(10.2)させているときに狙撃目標となった場合、狙撃兵はトラックの代りにSLを攻撃する;“1”の狙撃兵攻撃はSLを故障させ“2”は固有操作班を釘付けにする。

10.13 AFV搭載型サーチライト: SSRの指示がある場合、AFVはサーチライトを装備できる。AFV搭載型サーチライト(AMSL)は副兵装(D1.34)と考える。AFVのサーチライトは砲塔か車体前部のどちらかに搭載される。SL CA(C3.2)は砲塔搭載ならTCA、車体前部搭載ならVCAを基準とする。



10.131 AMSLの故障⁵⁴: 砲塔搭載SLが点灯(10.2)中に、何らかの砲塔搭載兵器が射撃したなら(あるいは、車体前部搭載SLが点灯中に車体前部搭載兵器が射撃したなら)、そのSLは自動的に故障する【例外:両方の状況で:FT射撃】。なんらかのIFT攻撃(露出状態でない操作班に対する仮定の付随攻撃も含む)は、SLを非装甲車両とみなして判定し、走行不能の結果は故障、除去の結果は恒久的な使用不能とみなす。SLはそのIFT攻撃に、+2DRMを受ける。

10.132 DYO: AFV搭載型SLは、車両毎にコストが4ポイント増加する。



10.2 照明ビーム(Illumination Beam)⁵⁵: SLによって“発射”された光線を、照明ビーム(IB)と呼ぶ。IBは、SLの区域からLOFに沿って目標区域で終わるIBレーンを作り出す。IBレーンが確立(10.4)に成功したら、そのSLは“点灯”したとみなし、目標区域にはIBレーン・カウンターを置き、SLには“on”面を上にしたSL CAカウンターを(適切なPrep、First、又はFinal Fireカウンターと一緒に)乗せる。点灯している間、SLは隠蔽状態を獲得できず、IBレーンを確立した場合隠蔽を喪失する。GMSL/TMSLで確立されるIBレーンの最大射程は44ヘクスであり、AMSLでは18ヘクスである。

10.21 IBレーンの取り消し: 以下のいずれかの事項が生じた場合、IBレーン・カウンターは自動的に取り除かれる(すなわち、SL CAカウンターが裏返されるか取り除かれ、“消灯”状態となる):

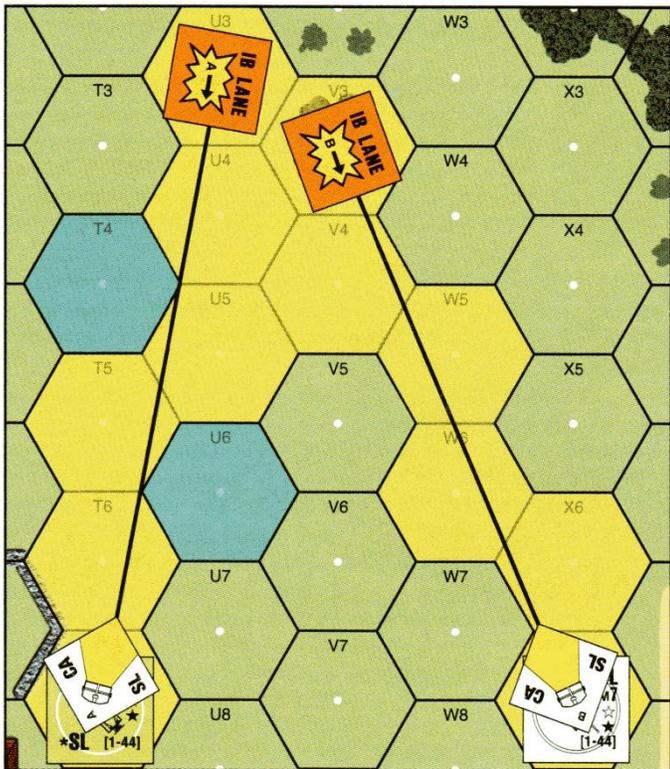
- 自発的にIBレーンをキャンセルした(10.52);
- SLが“追跡(Track;10.44)”を試みる間に、対象となる敵ユニットが移動し、LOS/CAからいなくなった;
- IBレーンが10.45による維持をできなかった;
- SLが故障状態/使用不能状態である(10.112;10.121;10.131;10.45);
- 操作している歩兵/固有操作班が統制状態でない;
- 車両に放棄カウンターが乗せられた;
- トラックもしくはAFVが機動の試み(D2.401)に成功した;
- 敵ユニット【例外:非武装、非装甲車両】がSLの区域に進入した;
- 『煙幕』がSLの区域に存在する。

10.22 照明区域: SLから目標区域への同一レベル(B.5)LOFに沿ったすべてのヘクス【例外:1つの頂点のみを通過したヘクス】に含まれる全区域中、SLのLOS内にあるものは照明(E1.9)される。LOFが頂点方向ヘクス列に沿っているなら、SLを使用しているプレイヤーは、火線(A9.221)と同様に、IBレーンが左右どちらのヘクスを含むのか宣言せねばならない。IBレーンが同一レベルLOF



10.22

を通過していないなら、目標ヘクス内の区域 (SLのLOS内にあるもの) だけが照明される。SLが点灯(10.2)している時は、SLヘクス内のすべての区域が照明される。10.221参照。



例：ヘクス44T7のTMSLはU3を目標として確立できた。LOFを通るヘクスは、TMSLヘクスを含めすべて照明された。しかし、ヘクスT4とU6はLOFが1つの頂点のみを通過しているため照明されない。同様に、X7のGMSLはV3にIBレーンを置き、GMSLヘクスを含めLOFが通過する全ヘクスを照明した。ヘクスW5に+3『煙幕』カウンターがあるなら、W5、V4、V3は照明されない。ただし、それらのヘクスにLOSがあるすべてのユニットのNVR内として扱われる(10.221)。

10.221 妨害の効果⁵⁶：IBレーン内で、煙幕/霞(E3.32)の影響により+3以上の妨害を被る全ヘクスは照明されていないが、それらにLOSのあるすべてのユニットのNVR内にあるとみなされる。

例：10.22の図を参照。X6、W5、そしてW6に煙幕手榴弾が置かれたとする。X6とW6は依然として照明されているが、W5、V4、V3は—LOS内の全ユニットのNVR内とみなされる—照明されていない。W6にいるユニットは、X6、あるいはX7を射撃する場合、+2B幻惑LV DRM(10.25)を被るが、W5、V4、又はV3のユニットは被らない。

10.23 SLヘクスへの効果⁵⁷：+1夜間LV DRM(E1.7)は、点灯(10.2)したSLと同じヘクス内のユニットに対して決して適用されない。点灯したSLに対するすべてのTHの試みには、-1DRMが適用される【例外：IB幻惑効果が適用される場合；10.25】。点灯したSLは潰走に関して、確認済みの武装した敵ユニットとみなされる(A10.51)。

10.24 目標ヘクスへの効果：目標ヘクス内の照明区域にある秘匿カウンターは(もしあれば) 隠蔽状態【例外：E1.43】の実際の内容物と置き換えられる。目標ヘクス内の照明区域にいる混乱ユニットは、目標ヘクスが開路地なら自動的にDM状態となる。

10.25 IBによる幻惑 (IB Blindness)⁵⁸：TH (および砲兵器の命中後における解決ではない)FT DRには、以下の条件がすべて満たされる場合、+2 IB幻惑LV DRMが適用される：

- ・射撃側と目標側は同じIBレーンによって照明された区域にいる；
- ・目標に対するLOSはIBレーンによって照明された区域をだけを通過する；
- ・目標は射撃側よりSLヘクスに(ヘクス換算で)近い。

W

例：10.22の図を参照。U4にいるユニットは、T6、あるいはT7のユニットに射撃する場合、+2 IB幻惑 LV DRMを被る。

10.3 SL視認TC：SLの目標区域決定前に、SLの操作班/戦車指揮官(10.43参照)は、SLと目標区域間のLOFに基づいたSL視認TCに成功しなければならない。このTCは、以下の累積するDRMを適用した修整後DRが土気値以下の場合成功となる。

要因	DRM
CA外へのヘクスの足変更ごとに…[T : +1/+1/+1] [ST : +2/+1/+1] [NT : +3/+1/+1] 【例外：GMSL/TMSLの最初のヘクスの足変更…+0】	
射程……………	0-6 : +0 7-12 : +1 13-18 : +2 19以上 : +3
LOS/LV 妨害……………	LOS/LV 妨害毎に【例外：E1.7】
確認済みの敵ユニットがいない区域 ¹ ……………	+2
敵ユニットがFFMO/FFNAMの対象となっている区域……………	-1(各々)
敵ユニットが危険な移動を実施している区域 ² ……………	-2
移動中/起動中の敵車両を含む区域……………	-2
SLが捕獲使用/不正規使用……………	-2(各々)
目標区域が照明/照準区域……………	-2(各々)
操作している歩兵/操作班が釘づけ状態……………	-2
包囲状態……………	-1
指揮修整……………	-X
麻痺(D5.34)/ハッチ閉鎖状態のAFV……………	-1(各々)
LOFが1つ以上の照明されたヘクスを通過……………	-1
SL区域が照明されている……………	GMSL/TMSL : +1 AMSL : +2

1：照準区域(10.43)、発射光(E1.8)が含まれる、移動する敵ユニットが含まれる場合には適用しない。

2：敵ユニットがSLのNVRを超えた区域にいる場合には適用しない。

10.31 射撃側のCA外にある区域を目標とするなら、視認TCの結果にかかわらずCAは変更される。SL視認TCの実施は(成功するか否かにかかわらず)射撃の実施とみなされる(E1.8)；しかし、それ自体は隠蔽を喪失する行動(A12.141)ではない。発射光カウンターはSLが点灯(10.2)しない限り、通常はAFPhの終わりに除去されるが、点灯された場合にはそのまま維持される。

10.4 SL目標：SLは、敵ユニットではなく区域を目標にする。SL視認TC(10.3)に成功したなら、IBレーンとCA SLカウンターを10.2に従って配置する。目標区域は、昼間シナリオのように引かれたSLのLOS内(10.42参照)にある事のみが必要である。目標区域までのLOS判定(この判定は自由である)が遮断されていた場合、SL視認TCは自動的に失敗し、SLは射撃を行ったとみなされる(適切なカウンターを置く)。SLと目標区域間のLOSは常に中心点に引かれる(A6.1)。

10.41 目標の制限：SLは自身のヘクスを目標にできず、SLの区域に『煙幕』がある場合、どの区域も目標にできない。林/ジャングル/竹林/建物内のGMSL/TMSLは、どの区域も目標にできない。TMSL/AMSLは、迂回中もしくは機動状態の場合、どの区域も目標にできない。GMSL/TMSLを操作する歩兵/固有操作班が釘づけ状態なら、SLのCAは変更できない。10.2の射程制限も参照。

10.42 LOS障害物：SLのLOSと視認TCに関して、以下の地形タイプもLOS障害物(A6.2)に追加される：果樹園(B14.2)、オリーブ園(B14.8)、疎林(B35)、ヤシ林(G4)、および倒壊していない小屋(G5.2)。

10.43 照準区域：SLはC6.41-43に従って、1区域を照準区域に設定できる【例外：SLはCAを変更した場合、それ以降照準区域DRMを失う】。SLが照準区域を目標にした場合、SL視認TC(10.3)に-2DRMを受ける。SLの最初の視認TCが照準区域に対して行われるなら、そのTCは自動的に成功する。AMSLはAFVのMAによる照準区域と異なる区域を照準できない。



W

10.44 追跡(Tracking)⁵⁹：点灯したSL(10.2)は、C6.51に従って目標区域から退出する敵ユニットを“追跡”してよい【例外：追跡の決定は敵ユニットがその区域から退出しようとした時に宣言せねばならず、LOS判定の結果、SLのLOS外への移動であることが明らかになった場合、IBレーンは自動的に取り除かれる(10.21)】。新たなヘクスが目標ヘクス(10.24)となり、敵ユニット進入のためのMFを消費した時点でその区域はすでに照明されていると仮定する。SLのCA外へ移動する敵ユニットを追跡する場合、SLは(兵器の射撃と同様に)必ずCAを変更せねばならない。CAを変更しない場合、IBレーンは取り除かれる。

10.45 IBレーンの維持：自軍のPFPh/敵のMPHの開始時、そのターンのフェイズプレイヤーが射撃/移動を始める前に、確立したIBレーンを有するSLは、信頼性DRを実施することでその位置にIBレーンを維持する試みができる。修整後DR10以下で、IBレーンはその位置に維持される(“Prep”か“First Fire”カウンターをSLに置く)。修整後DR11は故障をもたらし、12でSLは使用不能となる。適用され得るDRMは、厳冬(W.4)の+1のみである。SLの修理については10.53を参照。信頼性DRを行わないなら現行のIBレーンは直ちに取り除かれるが、そのSLは別の区域を目標にする試みが可能である。

10.5 SLの使用：IBレーン(10.2)は、シナリオ中にE1.91の事項の1つが生じるか、あるいは軍隊ラップ(7.8)が鳴るまでは確立できない：SLはこれに関して星弾と同様に考え、E1.92の制限に従って、1フェイズにつきヘクス毎に1回のみの試みが可能となる。

10.51 SL使用制限：シナリオで最初の星弾/IR/IBレーンが発射/確立されたプレイヤーターンの後、SLのIBレーン確立は、自軍のPFPh/敵のMPHの開始時、そのターンのフェイズプレイヤーが射撃/移動を始める前に行わねばならない【例外：MPHにおいて、移動中の敵ユニットを含む区域がSLのNVR内であれば、そこを目標(10.4)にできる】。E1.921のタイミングに関して、IBレーンは星弾の発射と同等とみなされる。

10.52 自発的キャンセル⁶⁰：IBレーンは、その所有者のPFPh/DFPh/AFPh中か、あるいはIBレーンの照明範囲内(10.22)に敵ユニットが存在しない場合、いつでも自発的に取り除ける。発射光カウンターは10.31に従って除去される。

10.53 修理：故障したSLはA9.72に従って修理される【例外：CT AFV搭載の故障したSLは、AFVがCE状態のときのみ修理できる】。

10.6 サーチライト戦場照明(SLBI)⁶¹：雲量(E1.11)が分散雲か曇天の夜間シナリオにおいて、SLBIが有効である旨がSSRで指示される場合がある。SLBIが影響するすべてのヘクス内の全区域【例外：地下；完全建物；密生ジャングル/竹林(G2.3)】が照明(E1.9)される。強風(A25.63)/霧(E3.31)/霞(E3.32)/雨(E3.51)/降雪(E3.71)、またはすべてのタイプの砂塵(F11.7)が影響する区域には、SLBIの照明は効果がない。

例：SSRによって、天候が曇天(E3.5)であることと、SLBIが地区盤全体に影響することが指示されている。風の変化DRによって雨(E3.51)が降り始めた場合、SLBIの照明効果は直ちに停止する。また、雨が止んだ場合には、SLBIの照明効果が直ちに効果を発揮し始める。

W章脚注

1.W.1 朝鮮戦争(KW)ルール：朝鮮戦争は1950年6月25日に、北朝鮮が韓国に侵攻することで始まった。1945年に朝鮮が日本から解放されてから朝鮮戦争が始まるまでの間、朝鮮半島では共産ゲリラと反共産勢力間での戦闘が継続的に行われていた。ここで用意されたルールの多くは、それらの戦闘行動に対してもよく適合する。

2.W.2A 国連(UN)軍：このリストには医療部隊のみを派遣した国連加盟国(インド、イタリア、ノルウェー、スウェーデン)が除外されているが、厳密にはその時点で国連に加盟していなかった大韓民国が含まれている。各国連軍戦闘部隊が従事していた期間は、以下のとおりである：

南朝鮮国防警備隊：1946年6月 - 1948年8月

大韓民国陸軍：1948年9月 - 1953年7月

大韓民国海兵隊：1949年4月 - 1953年7月

アメリカ合衆国

- 陸軍：1950年7月 - 1953年7月

- 陸軍空挺隊：1950年9月 - 1953年7月

- 陸軍レンジャー隊：1950年9月 - 1953年7月

- カトゥサ：1950年9月 - 1953年7月

- 海兵隊：1950年8月 - 1953年7月

イギリス連邦：1950年9月 - 1953年7月

- 第41独立コマンド、イギリス海兵隊：1950年9月 - 1951年12月

他の国連軍：1950年10月 - 1953年7月

3.W.2B 共産軍：各共産軍が従事していた期間は、以下のとおりである：

朝鮮人民軍：1948年2月 - 1953年7月

共産ゲリラ：1946年 - 1952年

中国人民義勇軍：1950年10月 - 1953年7月

4.W.4 融雪地表：朝鮮での急激な地表の解凍は地雷に悪影響を与え、不発を頻発させた。

5.W.4 ジャイロスタビライザー：米軍の戦車指揮官達はジャイロスタビライザーの適正な使用を重視しておらず、取り外されたり、なおざりな保守整備しか受けていないが多かった。

6.W.6 銃剣突撃：大火力時代の戦役であるにもかかわらず、国連軍部隊は多くの場面で銃剣突撃を取行した。特にフランス、エチオピア、そしてトルコの部隊は、これによって敵に肉薄することで知られていた。

7.W.7 時限(VT)信管：近接信管は関連技術の機密保持のため、WW2と朝鮮戦争の間では時限(VT)信管と呼ばれた。もともとは航空目標を効果的に撃墜するべく開発され、組み込まれた小型センサーが目標までの距離を測定し、その距離が設定を超えた時点で弾頭が起爆するようになっていた。これにより爆風と破片効果が最適化され、特に爆風の致命度が劇的に増加する結果をもたらした。近接信管は最初に105mm榴弾に使用され、後に他の弾薬にも搭載された。

8.W.8 HEAT対6以上のAF：HEAT弾の実際の貫通力は、命中した装甲の傾斜に大きく影響された。M9A1 2.36インチバズーカ(BAZ 45)がT-34/85に効果の無い要因の1つは、この影響のためだった。このルールの不発効果は、傾斜装甲に対する実際の弾頭着発地点の様々な可能性を反映させ、ゲームの根幹にあるHEATの基本TK#(これは最大装甲貫通力を基本に算出された)に変更を加えることなく、実際の装甲との交戦結果に近づくように用意された。

9.W.8A バズーカ：2.36インチバズーカ(BAZ 44/45、および朝鮮に紛れ込んだいくつかのBAZ43)の弾薬は、WW2の備蓄であった。それらの経年による劣化は、T-34/85に対する無効性の大きな要因となった。古いタイプのBAZに対する追加DRMにより、簡単にこのことを表現した。1950年7月の戦争開始時点で、アメリカ軍は新型のM20A 13.5インチ“スーパー・バズーカ”(BAZ 50)を導入し始めた。これはT-34/85に対する有効性を直ちに実証し、KPAの装甲優位性の終焉をもたらすのに貢献した。



脚注10

10.W.10A 打上げ照明弾：仕掛けが作動した場合、打上げ照明弾は空中へ発射され、パラシュートでゆっくり降下する星弾を発火させた。

11. 1.3 険しい丘：歩兵でも難儀する朝鮮の険しい丘は、車両にいたってはほぼ行動不能であり、この戦争中の機甲および自動車化部隊の役割を大いに制限した。

12. 2.1 アメリカ陸軍：WW2終結から朝鮮戦争までの間に、アメリカ陸軍は歩兵小隊を再編成していた。小隊司令部と3個の12名ライフル分隊で構成する代わりに、新たな編成では小隊指令部、3個の9名ライフル分隊、そしてM1916A6 LMGとバズーカを持つ火器分隊で構成されていた。これを表現するのに、より小さな火力の新しいアメリカ軍分隊と、火器分隊を表す新しいMMC、それに加えて区域のスタック制限に抵触しないような追加のHSに関する特別ルールを用意することもできただろう。『Forgotten War』では、プレイアビリティを優先して通常の陸軍MMCを用いることとし、火器分隊の装備と構成員が小隊内の3個分隊に分配されているとみなすことにした。

13. 2.12 レンジャー隊：朝鮮戦争開戦の後、アメリカ陸軍はWW2で様々なエリート部隊に所属していたベテランを中心とする志願兵によって、特殊レンジャー部隊を編成して訓練し、強襲と偵察任務に投入した。一般に、レンジャー(空挺)中隊は各陸軍師団へ配属された。また、レンジャーユニットは、この戦役中に見られた“ウルフハウンド・レイダース”のような特別なエリート部隊を表現するのにも使えるだろう。レンジャー隊が彼らの特殊任務ではなく前線歩兵として投入された場合、通常のエリートクラスMMCを用いるか、SSRによって自己回復能力を適用しないことになるだろう。

14. 2.1 カトウサ(KATUSA)：カトウサは(多くは強制的に)徴兵された人員で構成され、編成表を充足させる目的でアメリカ軍部隊に組み込まれていた。特筆すべき個々の事例が多数存在するが、典型的なこの部隊の構成員は英語を話せず(通訳はいないのが普通だった)、訓練は不十分で、装備は貧弱だった。ほとんどのアメリカ軍部隊が各分隊に少数(3~6名)のカトウサを各分隊へ組込んでいたが、他の部隊(具体的には、いくつかの戦闘支援部隊や輸送部隊、第24歩兵師団、第25歩兵師団所属の1個連隊)は韓国人のみの分隊や小隊を作り、一般的に米国人士官が指揮していた。(長津湖の戦いにおいて、連隊戦闘団31; RCT-31は、そのライフル大隊の40~50%がカトウサだった)カトウサMMCは、そうした韓国人のみによる補助部隊を表すために用意された。戦争の経過とともに、人的損失とアメリカ人士官による積極的な人選により、韓国人兵士の信頼できる指揮官が誕生した。カトウサは米国人兵士のようにすぐに入れ替わることが無かったため、時に彼らは部隊内で最も経験豊富な集団であった。1952年10月に、第8軍が韓国人のみの部隊を解散させると宣言した後、カトウサは珍しい存在になった。

15. 2.14 KW初期のアメリカ陸軍：朝鮮戦争に赴いた最初のアメリカ陸軍部隊は、嘆かわしいほど戦闘の準備が整っていなかった。日本での進駐任務に慣れ切っており、彼らの基礎体力は貧弱で、訓練は乏しく、加えて装備の保守管理は劣悪だった。軍事物資の状態もほとんどがひどいもので、多くの備蓄品はWW2終結後、アジアと太平洋の様々な地域で野ざらしにされたままだった。これらのKW初期のアメリカ陸軍ベナリティは、おそらく1950年8月以降もいくつかの部隊に適用される可能性があるだろう。

16. 2.2 アメリカ海兵隊：WW2後期と朝鮮戦争時代の海兵ライフル分隊は、4名の射撃チーム3つに分割できるように編成されていた(G17.11に対する脚注43を参照)。複雑さを増し、更にはバランスに影響することを承知でこの再現を試してみたいと願うプレイヤーは、以下に述べる指針を参考にするとよいだろう。7-6-8分隊が展開する(あるいは、ELRの置き換えを被った)場合、3個の(“RISING SUN”に入っている)2-4-8HSと(ELRの置き換えの場合は混乱状態で)交換する。スタックと分隊相当に関して、2-4-8HSは1/3分隊と考え、乗車/跨乗に関しては3 1/3PPと考える。非武装2-4-8HSが再武装したなら、2-4-8にもどる。7-6-8が損耗したら、50%の可能性で2-4-8HSを2つ失う(無作為に決定する; 無作為選択ではない)。7-6-8分隊への統合には2-4-8HSが3個必要である; 2つの2-4-8HSは統合できない。各7-6-8分隊は3VPの価値がある。

17. 2.2 後方梯隊：すべてのU.S.M.C.兵士は(パイロットを含め)、歩兵戦闘の訓練を受けていた。

18. 3.2 大韓民国陸軍(ROKA)：1910年から1945年まで、朝鮮は日本の植民地だった。WW2終結後、1945年9月8日に上陸したアメリカ軍が38度線から南の地域を占領し、それと同時に国の北部に進入したソ連軍部隊が38度線より北の地域を占領した。アメリカとソ連の占領は、国土全体を統括する恒久的な政府が樹立するまでの一時的なものになるはずだった。結論を言えば、1948年に実際に起こった事は、北朝鮮での金日成が指導する共産主義政権(朝鮮民主主義人民共和国)樹立と、それとほぼ同時期の南朝鮮における、李承晩率いるアメリカ主導の政府(大韓民国)の成立だった。

大韓民国陸軍(ROKA)となった最初の部隊は、南朝鮮警備隊第1連隊第1大隊であり、この部隊は1946年1月14日に活動をはじめ、ソウル近郊の旧日本軍兵舎で訓練を開始した。ソウルの連隊以外に、1946年4月までに、韓国の行政区ごと一釜山(プサン)、光州(クアンジュ)、大邱(テグ)、裡里(イリ; 現益山)、大田(テジョン)、清州(チョンジュ)、そして春川(チュンチョン)に1個ずつの警備隊連隊が設立された。大韓民国は1948年8月15日に公式に建国宣言をし、その年の12月15日には大韓民国国防省、大韓民国陸軍、および大韓民国海軍が正式のものとなった。この時に、第1、第2、第3、第5、第6、および第7警備隊連隊は、それぞれ同名の歩兵師団となった。2ヶ月後、首都警備司令部から首都師団が編成された。同時に第8、第11歩兵師団が残りの2個警備隊連隊から編成された。大韓民国軍に対するアメリカの軍事顧問は、韓国軍事顧問団(KMAG)―正式には大韓民国派遣合衆国顧問団―と呼ばれた。1つにはアメリカの戦略が韓国を軽視していたために、もう1つには李承晩が可能ならば武力によって朝鮮の再統一を図る恐れがあったため、韓国陸軍に与えられた武装は貧弱なものとなった。1950年6月25日の朝鮮戦争開戦時において、韓国陸軍は北朝鮮の激しい攻撃に対して準備が整っていなかった。エリートクラスのROKA分隊の不在は、この事を表現する一助となっている。戦争の緒戦における大量の損害は、アメリカの援助のもとでゆっくりと再建された。戦争の経過とともに、韓国陸軍はいくつかの機甲部隊と砲兵隊を含む3個軍団へと発展した。

19. 3.3 大韓民国海兵隊(KMC)：大韓民国海兵隊は1949年4月に設立され、屈強で士気の高い部隊として評価を得た。アメリカ海兵隊に類似した組織として密接な関係を持っており、朝鮮戦争の一時期、アメリカ第1海兵師団にはKMCの1個連隊が四番目の歩兵連隊として配属されて活動していた。1952年から、KMCは独自の指揮権を得た。

20. 3.31 日本式装備のKMC：KMCの部隊は、当初は主に旧日本軍の装備で武装していた。仁川(インチョン)上陸への準備において、アメリカ軍の武器と装備で再武装された。1951年の初め、KMCは幹部組織と武装をU.S.M.C.の標準に近づけるため、一連の改編と訓練計画に着手した。

21. 3.36 KMC OBA：KMCは設立当初、組織的な砲兵隊を全く有しておらず、アメリカ海兵隊からの間接射撃を利用していた。やがて、アメリカ軍はKMC独自の砲兵隊を編成するため、必要となる武器と訓練を提供した。

22. 4.1 イギリス連邦陸軍：イギリスとその連邦国は、朝鮮に重要な部隊を布陣させた。当初は従来通りのリー・エンフィールド・ライフル、ステン短機関銃、そして、ブレンおよびヴィッカーズ機関銃で武装していた。それらの部隊(特にカナダ軍)は戦争の進展とともに、徐々にアメリカ製兵器で武装していった。戦争初期のアメリカ陸軍と比べて、イギリス連邦軍はより良く戦闘の準備が整っていたので、エリートもしくは1線級ユニット、またはその混合部隊と、ELR置き換え用の2線級MMCによって表される。

23. 4.2 イギリス海兵隊：イギリス海兵隊の第41(独立)コマンドは、朝鮮戦争に登場した唯一のイギリスコマンド部隊である。投入当初の1950年9月から10月には襲撃部隊として用いられ、11月から12月には長津湖の戦いで米軍第1海兵師団に配属された。その後1951年末に戦争から撤収するまでの間は、再び襲撃任務に従事した。制限と装備はアメリカ軍と同様であったが、彼ら独自の緑のベレー帽はそのままであった。

24. 4.3 カナダ軍自動火器ボーナス：1950年12月、カナダ軍の1個歩兵大隊が朝鮮で活動をはじめ、後に(別の連隊から抽出された)他の2個大隊と共に



W

第25カナダ歩兵旅団となった。各大隊は、カナダ陸軍特殊部隊から特別に作られた——そのすべてが志願兵であり、WW2の退役兵、職業軍人、および新兵が混在していた。朝鮮戦争は、完全にアメリカ製兵器で再武装するというカナダ軍の計画を頓挫させ、WW2時代の装備の備蓄が倉庫から急いでとり出された。大量の中国軍SMGと対峙した部隊にとって、ボルトアクションライフルを使い続けることはひどい失望の種であり、米軍部隊との取引によって多くのM1ライフル（半自動）とM2カービン（全自動）が非公式に入手された。1952年の王立カナダ連隊(RCR)のある大隊では、その歩兵装備のおよそ50%がアメリカ製兵器となっていた。1953年5月から、韓国人部隊が韓国駐屯のカナダ陸軍に導入され始めた。それらの部隊は連邦師団韓国人増強部隊 (Korean Augmentation Troops to Commonwealth Division ; KATCOM)として知られていた。KATCOMはライフル分隊へ直接編入され、10名のライフル分隊に3人のKATCOMが編入された。カナダ軍はアメリカ軍と同様に、言語その他でのこんなに直面したが、同時に人的資源の増強は非常に有益なものであり、多くのKATCOMが彼らのカナダ軍部隊のもと実戦に臨み、幾ばくかの損失を被った。KATCOMのいる分隊とそうでない分隊は、ゲームゲーム上まったく同一である。

25. 5.1 他の国連軍 (UNC) :多くの国が国連軍(UNC)の一部として、その軍隊を朝鮮半島に派遣した。我々はアメリカでもイギリス連邦でもない、それらのUN部隊を『他の国連軍(UNC)』と呼ぶことにした。OUNCの部隊は、通常アメリカ製の兵器と装備を使用していた。新兵(G)ユニットが存在しないのは、これらの派遣軍がより経験豊富だったという特性による。

25. 6.1 朝鮮人民軍 (KPA) :朝鮮民主主義人民共和国(DPRK)——通称“北朝鮮”——の地上軍である“조선인민군”の最も良い訳語は“朝鮮人民軍(KPA)”だが、国連の文書（およびいくつかの中国とソビエトの情報源）では一貫して北朝鮮人民軍(NKPA)と呼ばれていた。KPAはその訓練、編成、装備に関して、ソ連軍を模して設立された（戦闘においてソビエトの軍事顧問がKPA部隊を直接指導する事例もいくつかあった）。強靱で攻撃的で有能なKPAは、最初の攻勢で大成功を収めた。国連軍がより経験豊富な部隊を投入して優れた資材を大量に送り込むと、KPAは蹂躪され、CPVAの脇役に転じた。

27. 6.1 人海戦術 :WW2の終わりにはソ連軍の戦術的進歩を遂げ、人海戦術は減多に行われなくなり、エリート分隊はより小さなチームに展開するようになった。KPAにはこの進歩した戦術が伝授されたため、彼らは機会があっても人海戦術の使用を避け、エリート分隊は展開が可能となっている。人海戦術(A25.23)は必要に応じ、SSRによって指示されることになるだろう。

28. 6.3 虐殺 :多数の捕虜を処刑、虐待するなど、KPAの国連軍捕虜に対する残虐性は顕著なものだった。

29. 6.5 共産ゲリラ :WW2の終結から朝鮮戦争開戦までの間、北朝鮮は広範囲に南でのゲリラ活動を支援した。これらは破壊活動のような小規模のものから、戦闘員・民間人あわせて60,000人以上の死者を出した（1948年4月に起きた）済州島（チェジュド）四・三事件のような大規模な暴動にわたった；[下記訳注参照](#)。1950年9月の釜山境界線からの急速な退却の間に多くの北朝鮮部隊は完全に崩壊し、それらの幾つかは反乱軍として再編成され、北に移動する国連軍戦線の後方でゲリラ戦を展開した。このゲリラ問題に対し、国連軍は1951年12月から1952年3月まで“RAT KILLER”作戦と銘打った大規模な対ゲリラ戦を実施し、25,000人以上のゲリラを殺害、もしくは捕縛した。

※訳注:この文脈だと共産ゲリラの暴動によって6万人が死んだように読み取れるが、実際には共産シンパとして目をつけられた住民が白色テロ、あるいは軍・警察の弾圧によって大量虐殺、処刑された事件である。アメリカ主導の南朝鮮政権樹立に対抗すべく、左派の朝鮮労働党が武装蜂起したのが発端となり、その鎮圧を目的として、軍、警察、右翼青年団が送り込まれ、住民への弾圧が始まったのである（住民の中には左派の武装団に殺害されたものもいる）。弾圧は朝鮮戦争休戦後にも続き、その被害者数は2万から8万人と見積もられている。

30. 7. 中国共産軍 :初期の戦役におけるKPAの大規模な損害の後、中華人民共和国(RPC)は——直近の国内戦における国民党(G.M.D.)に対する勝利の余勢に乗って——朝鮮戦争での共産主義を先導する役割を担うことになった。中国は合衆国との直接的な戦争を避けるため、部隊に“義勇兵”の呼称を用いた。ジェット機と戦車の時代に逆行して、中国軍は徒歩での移動と兵員の人数に頼

る旧来の軍隊であった。ほとんどが農民出身であり、最低限の補給で生き延び、過酷な状況に耐えることができ、かつ戦場での隠蔽や浸透技術に優れていた。

31. 7.1 中国人民義勇軍 (CPVA) :中華人民共和国の武装部隊は人民解放軍(PLA)と呼ばれるが、中国は朝鮮に投入したそれらの部隊（そのすべてが人民解放軍の部隊がそのまま送られた）を中国人民義勇軍(CPVA)と呼んだ。この呼び名はしばしば中国人民義勇兵(CPV)や人民義勇軍(PVA)のように省略されたが、国連軍の文書では中国共産軍(CCF)と呼称された。1951年4月の最初の春期攻勢において、新規の人民解放軍部隊が初めて朝鮮に投入され、ここを境にCPVAの介入初期部隊からソ連式武装部隊へと置き換えられていく。しかしながら、この前後においても戦場では異なるタイプの部隊が混在しており、所属部隊にもよるが、1952年の非常に遅くまで、介入初期部隊が完全に置き換わることはなかった。

32. 7.121 擲弾兵 :CPVAの初期の装備は非常に貧弱で、重火器だけでなく時にライフルさえも不足していた。擲弾兵は、主に手榴弾と刃物で武装した部隊を表している。擲弾兵が歩兵中隊の基幹となることはなく、計画的な攻撃の際に先鋒部隊として意図的に編成され、遭遇戦、待ち伏せ攻撃、そして防御の際にはめったに見られなかった。擲弾兵は「介入初期」の期間が終わった後もいくつかの計画的な攻撃に参加したが、1953年までに段階的にその姿を消した。

33. 7.21 ステップ減少 :ステップ減少の導入は、3つの異なる特性を具体化したものである：砲火の下、および甚大な損害に直面したときにもCPVA部隊が確固たる意志を見せた（その理由の幾つかは、共産党の『怯懦を報告する』という方針による）という文書報告；一度始まった攻撃を修正、あるいは取りやめるための有効な通信手段の欠如；そして、斃れた戦友の武器を拾い上げる非武装の、もしくは貧弱な武装の兵士を含む部隊。

34. 7.3 指揮官 :1955より前の中華人民共和国では——革命軍の組織的文化を維持して——ヨーロッパ型陸軍と同様の名称を持つ階級構造を用いなかった。その代り、指揮官は自身の部隊内での地位によって区別された：副分隊長、分隊長、副分隊長、小隊長、等々。したがって、指揮官カウンターには名前しか記載されない。朝鮮戦争後の近代化においてソビエト型の階級システムが採用されたが、1965年には一旦廃止され、文化大革命が終わると再導入された。

35. 7.31 政治特校 (PO) :政治特校(PO)は中隊レベルまでのCPVA部隊に配属されていた。通常、最低1人のPOが各CPVAシナリオに登場することになるだろう。

36. 7.42 歩兵小隊移動 (IPM) :朝鮮戦争時代の報道と流布された俗説では、中国軍の攻撃は雄たけびを上げる兵士達の巨大な波で特徴づけられていたが、これは多くの場合真実ではなかった。とはいえ、CPVAの攻撃は大量の損害を被りながらも前進を続けるという、苛烈な特徴を示していた。CPVAは十分な通信手段を有しておらず、結果、戦術上の柔軟性欠如につながった。CPVAの部隊は攻撃計画を入念に（兵士レベルにいたるまで）指示され、その命令に忠実に従ったが、命令を修正できるのは中隊レベル以上の指揮官だけだった。入念な計画で首尾よく実行されたCPVAの攻撃は、戦闘が進展し、状況が急激に変化した際、破綻したり勢いを失ったりした。1951年の初めに前線が固定され始めると、中国軍の浸透および側面攻撃の可能性は減少し、CPVAは名高い大規模の人海戦術(A25.23)攻撃をいくつか実施したが、ほとんどの場合、中国軍にとって血塗られた大損害を被って終わった。人海戦術は必要に応じ、SSRによって指示されることになるだろう。

37. 7.5 偵察ユニット :CPVAの攻撃に際し、特別に訓練された偵察小隊を用いて広範囲に敵の布陣を調べるのが常であった。それらの部隊（攻撃部隊の5%を超えることは減多になかった）は敵の前線に近づくために1~3名のチームに分かれて情報収集のために浸透し、その後再編成してCPVA前線へ戻り、攻撃指揮を助けた。

38. 7.71 KW初期の夜間CPVA :介入の初期に、CPVA部隊は朝鮮半島の田園地帯を察知されずにすり抜けるという、不気味な能力を見せた。国連軍部隊への攻撃前に、中国軍は軍、あるいは師団規模の部隊を察知されずに集結させることができた。それだけでなく、小部隊では一貫して素早い移動と夜間



脚注38

における静粛な機動で国連軍部隊のすぐそばに浸透し、これを包囲して戦術的な奇襲効果を得ることが可能であった。国連軍の前線が安定し、夜間規定が改善されて通信手段が発達すると、この能力は見られなくなった。

39. 7.8 軍隊ラッパ：CPVAは、日中、夜間を問わず、指揮統制の助けとしてラッパ、太鼓、そして他の楽器を使った。自身の位置を露呈してしまうとは言え、これらの合図はしばしば大規模な攻勢が切迫していることを防衛側に知らせ、特に夜間においてはその士気を動揺させた。

40. 7.9 雑則：CPVAは敵の位置確認の情報源として民間人を広範囲に利用し、地形を通る隠れた道を知るために民間人に案内させた。CPVAは、大規模な攻撃の前には敵に可能な限り近い位置（100～200m）まで、時には敵の境界線内までも浸透し、（主に国連軍の航空攻撃を回避するため）夜間に攻撃するのが好んだ。+1drnを適用された偵察dr(E1.23)は、CPVAに通常与えられている民間人への尋問効果を補強するためのものである。

41. 7.92 築壕：CPVA部隊の多くは、生活のために過酷な労働に従事していた男たちで構成されていた。彼らは防衛地点を占めた際、広範囲な野戦陣地を素早く掘る能力を示した。

42. 7.95 隠蔽：CPVAの地形への隠れ方は、ある意味、朝鮮戦争時代の他の陸軍が行わなかったものだった。時にCPVA部隊は、地形が目立たない凹凸の間や収穫物、森、建物の中から、“どこからともなく”出現した。

43. 8. KW航空支援：朝鮮戦争は典型的な歩兵戦であったが、空軍力は重要な支援の役目を果たした。朝鮮で国連軍によって昼間近接航空支援に用いられた主要な航空機は、F-51 ムスタング、F4U-4BおよびAU-1 コルセア、そしてADスカイレイダーだった。戦争の初期には、北朝鮮はYak-9P戦闘機やI-10攻撃機を使用した。アメリカの空軍力がこれらを空から一掃した。

44. 8.1 航空機：ジェットの出現は、WW2以降の空軍の構成を変えた。制空と航空阻止任務は大成功を収めたが、初期のジェット機は近接航空支援には向いていなかった。彼らが渴望していたジェットエンジンは、戦場での耐久性を欠いていた。また、ジェット機には長く整備された滑走路が必要であり、それは彼らの基地が前線から遠い場所にあることを意味し、結果として近接航空支援の要請にうまく対応できなかった。任務には余り適していなかったが、この戦争で近接航空支援に使用された主なジェット戦闘機は、F-80CシューティングスターとF9F-2(4もしくは5)パンサー、及び後期型のF-84D(およびE/G)サンダージェットである。F.8ミーティアとF-86Fセイバーも、この任務に投入された。共産主義国（北朝鮮と中国の両国）は彼らのMiG-15ジェット戦闘機（しばしばソ連軍パイロットが操縦していた）を近接航空支援ではなく防空に用いた。FB 50カウンターは、すべての国連軍ジェット戦闘機を包括的に表している。

45. 8.12 ADスカイレイダー：朝鮮戦争での最優秀航空支援航空機は、AD-3/AD-4 スカイレイダーである。アメリカ海軍と海兵隊で使用された。スカイレイダーは正確に大量の搭載兵器を投下することができ、恐ろしい酷使にも耐えることができた。

46. 8.3 VT信管の爆弾：標準的な信管の代わりにVT信管を付けた汎用爆弾がVT爆弾である。それは“地域”攻撃用兵器として設計されたため地域目標タイプを用いるが、より強力な効果をもたらす。

47. 8.4 AFV認識範囲：1950年11月までに、北朝鮮の装甲兵力の大半は破壊され、残存したのはいくつかの自走砲部隊(SU-76M)で、間接射撃任務のみを行っていた。CPVAは全く装甲兵力を配備しなかったため、国連軍パイロットが誤認によって国連軍の戦車と交戦する可能性は非常に低かった。

48. 8.5 制限空域：航空機攻撃と砲兵支援を連携させる戦術が開発され、飛来する野砲の砲弾から航空機を守り、無駄な攻撃を減らす様々な方法が用いられた。これらの方法は最終的に“火力支援調整手段(FSCM ; Fire Support Coordination Measures)”として強固に構築された。

49. 9.前線航空管制員と近接航空支援：朝鮮戦争中のテクノロジー、技術、戦術、そして要請手続きの進歩は、戦術目標に対する航空および砲兵支援の連携能力を劇的に向上させた。

W

50. 9.1 前線航空管制員：WW2終結からの数年間と朝鮮戦争において、アメリカ海兵隊は洗練された近接航空支援管制発展の先駆者となり、その結果、要請に対する良好な反応と誤爆の減少、そして効果の増大を見た。特別に訓練された海兵隊員が、アメリカ軍、韓国軍、そしてその他の国連軍の作戦に対して支援を与えた。

51. 9.11 アメリカ海兵隊TACP：TACPは前線航空管制員として訓練されたパイロットと、地上支援の航空攻撃を連携・統制する改善された通信専門員によって構成されていた。アメリカ空軍と海兵隊は、それぞれのWW2での経験から得た近接航空支援に関する異なった理論に基づき、朝鮮戦争中は別個の方法でTACPを運用した。海兵隊では、TACPを大隊に配属し、戦術レベルで用いた；航空支援は、陸軍部隊も含めた前線部隊と密接に連携していた。一方、空軍と陸軍による近接航空支援のシステムはこれとは異なり、TACPはより専門の航空連携員の立場で師団に所属し、作戦レベルで用いられた——これはASLで扱う範疇外である。

52. 9.13 空中FAC：軽飛行機の空中FACも、航空支援統制システムの一部であった。アメリカ空軍のFACとして主に用いられたのはT-6テキサン練習機であった。海兵隊のパイロットと観測員は、OY-2センチネルとF4Uコルセアと同様の任務に就いた。後者は戦闘爆撃機だったので、(9.13とは異なり)空中戦で自身を守ることができた。

53. 10. サーチライト：WW2でのサーチライト(SL)は主に対空目標の探知を目的としており、サーチライト部隊は対空砲部隊に組み入れられていた。戦争末期にかけて連合軍が制空権を握ると、サーチライトは限定的ながら地上戦闘でも見られるようになった。時に工兵隊によって操作されたサーチライトは、朝鮮戦争では地上戦闘でより高頻度で使用されるようになった。国連軍部隊は、夜間作戦中の戦場を照らし出すために、異なる種類のサーチライトを用いた。

54. 10.13 AFV搭載型サーチライト：CPVAの夜間攻撃に対する反撃の一助とすべく、国連軍は既存のトラック/架車搭載のSLの補助として、信頼性の高いAFVにSLを取り付けた。M46パットンとセンチュリオンMk IIIの防盾の主砲上には、薄い装甲の18インチSLが取り付けられ、カナダ軍のM4A3E8シャーマンは14インチSLを搭載した。素早く光を消すためのシャッター付きのSLは、敵の掩蔽壕、機関銃陣地、その他の不審な場所を照らし出すのに非常に効果的であることを立証した。アメリカ海兵隊の戦車は、常に2両1組での作戦行動を行った。1両目の戦車が敵の陣地を見つけて照らし出す間に、暗闇に隠れた2両目の戦車が矢継ぎばやに数発の砲弾を叩き込み、照明役の戦車の危険性を最低限のものにした。1952年8月初めには、AFV搭載型SLを使用した作戦行動の効果が立証され、これらの戦車は中国軍砲兵の最優先目標となった。

55. 10.131 AMSLの故障：朝鮮戦争当時のSLは大変脆弱（特にそのフィラメントが）だった。激しい振動や急激な移動は、フィラメントやサーチライトの内部機構に損傷を与えた。SLを搭載した車両が、自身の装備するMA/CMG/SAを射撃した場合、当然のようにSL故障の要因となった。

56. 10.221 妨害の効果：夜間に大雪や霧の中で運転したことがある人なら、ハイビームを点灯したときにこれと同様の現象を経験したことがあるだろう。

57. 10.23 SLヘクスへの効果：SLが射撃側に直接向いていない限り、作動中のSLは自身の区域を目立たせることになる。

58. 10.25 IBによる幻惑：SLの方を見ることは大きな混乱を引き起こし、SLそれ自体、あるいはSLとの間にある目標を撃とうとする射手を“盲目”にさせる効果があった。

59. 10.44 追跡：普通の兵器とは違い、SLは絶えず明るいビームを“射撃”し、目標を照らし続けている。

60. 10.52 自発的キャンセル：SLが攻撃を受けた（攻撃が予想された）場合には、暗闇の遮蔽効果を再び得るためにその光を消すのが通例であり、ある地域の全目標が撃破されたかLOS外となった場合にもしばしば照明が消された。

61. 10.6 SLBI：“人工の月明かり”のコンセプトはWW1で導入され、WW2と朝鮮戦争の両方で何度か実施された。適切な準備の下、戦場全体に疑似日光の効果を作るため、低い雲が光を反射するように複数のSLが配置された。